黄金バット

下巻

第二話　地底の国〈後編〉

第三話　天空の魔城



永松健夫

「ウワッハッハッハッ！」高らかな笑い声とともに忽然とあらわれたのは、これぞわれらの正義の味方黄金バットだ!! なつかしの名作、戦後初の劇画、ここに完全復刻!!


黄金バット
第二話
地底の国
〈後編〉



＜前編のあらすじ＞

地下数千メートルの下につくられた理想の国〝地底国〟の入口をさがしあてた悪者ナゾー一味は、この国の宝物をねらってしのびよってきた。

正義と平和を保つため、大木探偵とまさる少年、蛇王は、地底国のシマ女王たちと力をあわせ、ナゾー一味に立ちむかうことになった。地底国のプクちゃんのおかげで、ナゾーにとらわれていたかず子は救い出せたものの、地底国で新しい機械を発明中のモーグリ博士に、ナゾーの魔手がせまった。あやうし、モーグリ博士！

――と、そのときである。とつじょ、「ウワッハッハッ！」高らかな笑いとともにあらわれたのは、おお、われらの黄金バットだ!!


1
黄金バットは、王宮めがけてサッととびおりた。
2


3
シマ女王よ
警戒せよ
三日間のうちに
ナゾーがやってくるぞ
あっ！
黄金バットさま

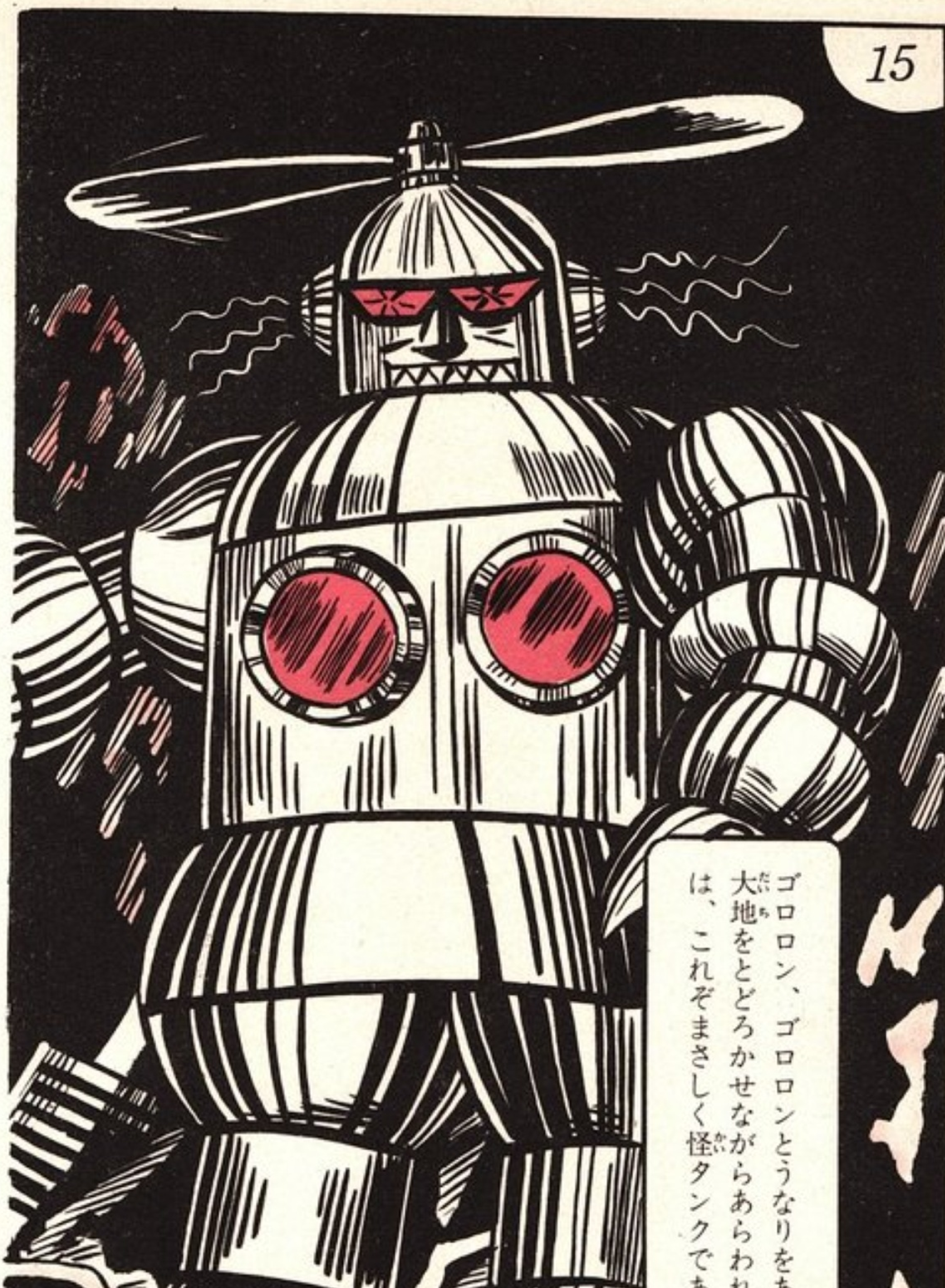

4
みんな一時避難していたほうがよかろう　ナゾーは新しい機械をもってやってくるであろう
5
そう女王にいい残すや、マントをひるがえして空高く飛び去る黄金バット……。


6
黄金バットさまがみんなに逃げよとお知らせくださったのです
女王さまは地底国人をつれて避難してくださいわしはまさるくんたちといっしょにここで街を守ります
7
地底国人たちは、第二地底国へむかってどんどん避難をはじめた。

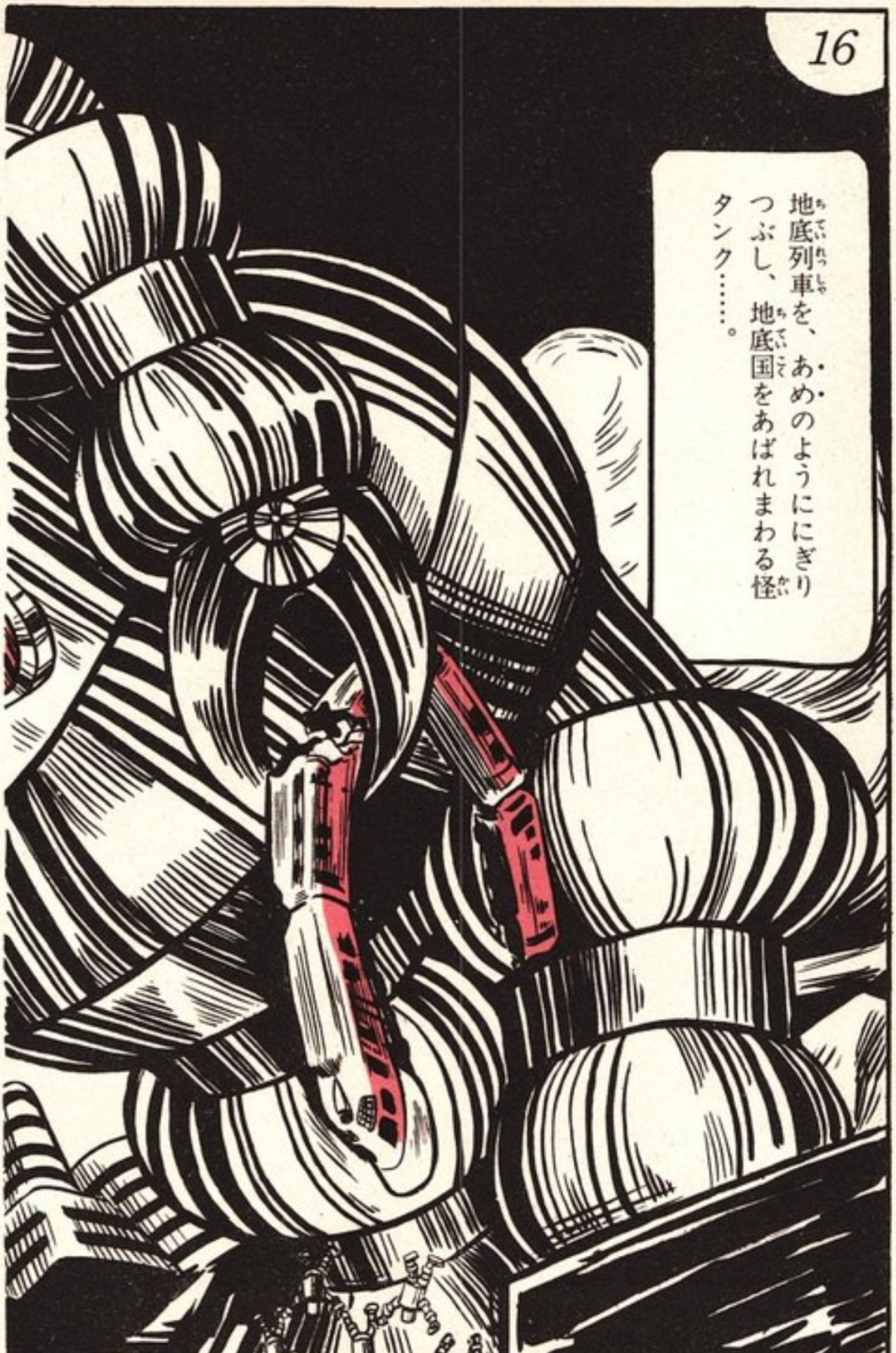

8
この国の自動車はずいぶんはやいですね女王さまの自動車もきているようですね
9
さあ！はやく女王さまも避難してください
地底国の停車場には、この国の人たちが、ぞくぞくとおしかけている……。

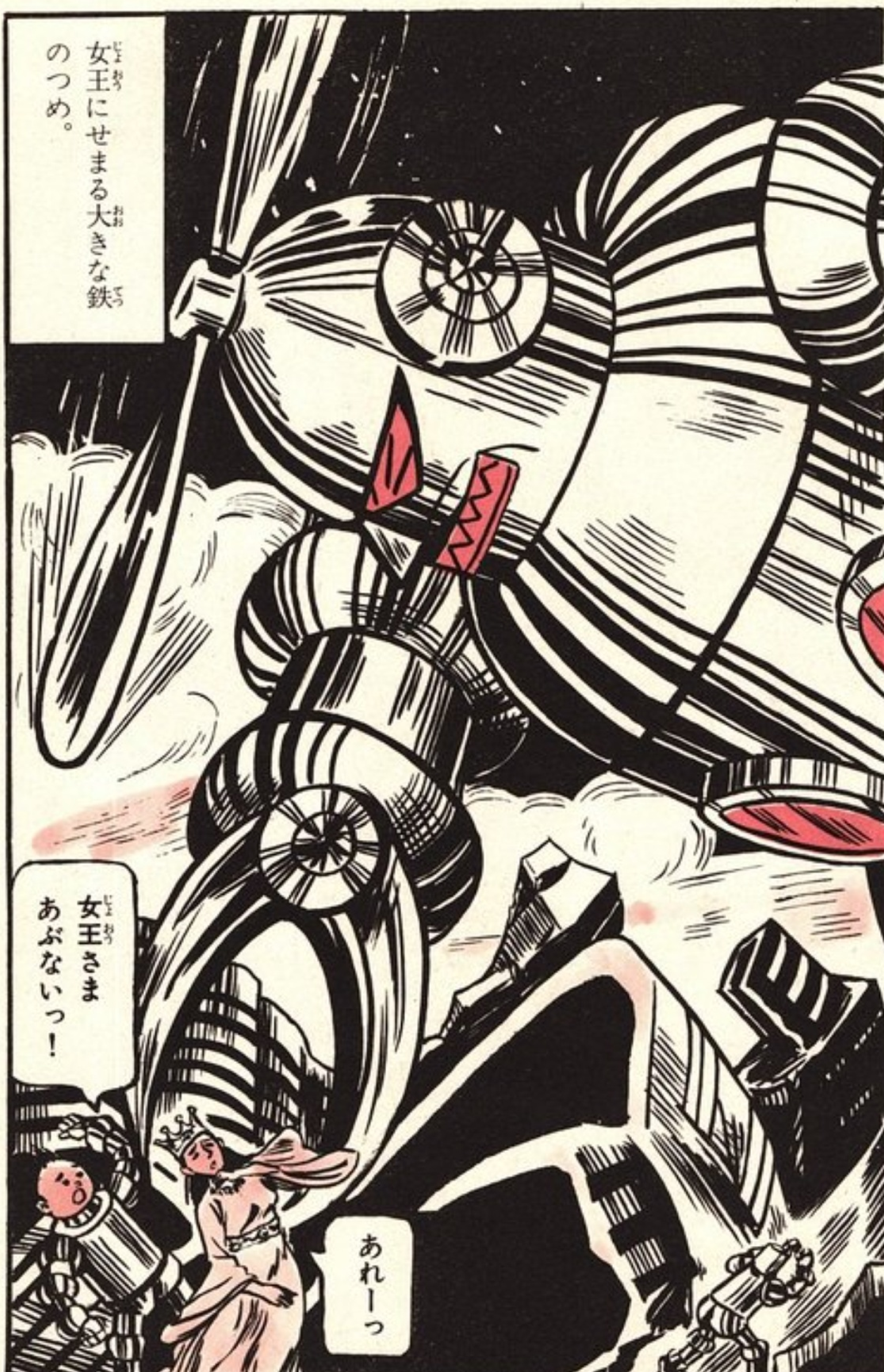

10
地底列車は、第二地底国へむかって
ぞくぞくと出発する。
11
シマ女王の
自動車も、
停車場に着
いた。
12
女王が自動車から
おりようとした
とき……。


13
おお！ このとき突如、大音響とともにくずれ落ちる停車場の建物。
14
女王さま あぶない！ 地震らしいですね！


15
ゴロロン、ゴロロロンとうなりをあげ、大地をとどろかせながらあらわれたのは、これぞまさしく怪タンクである。

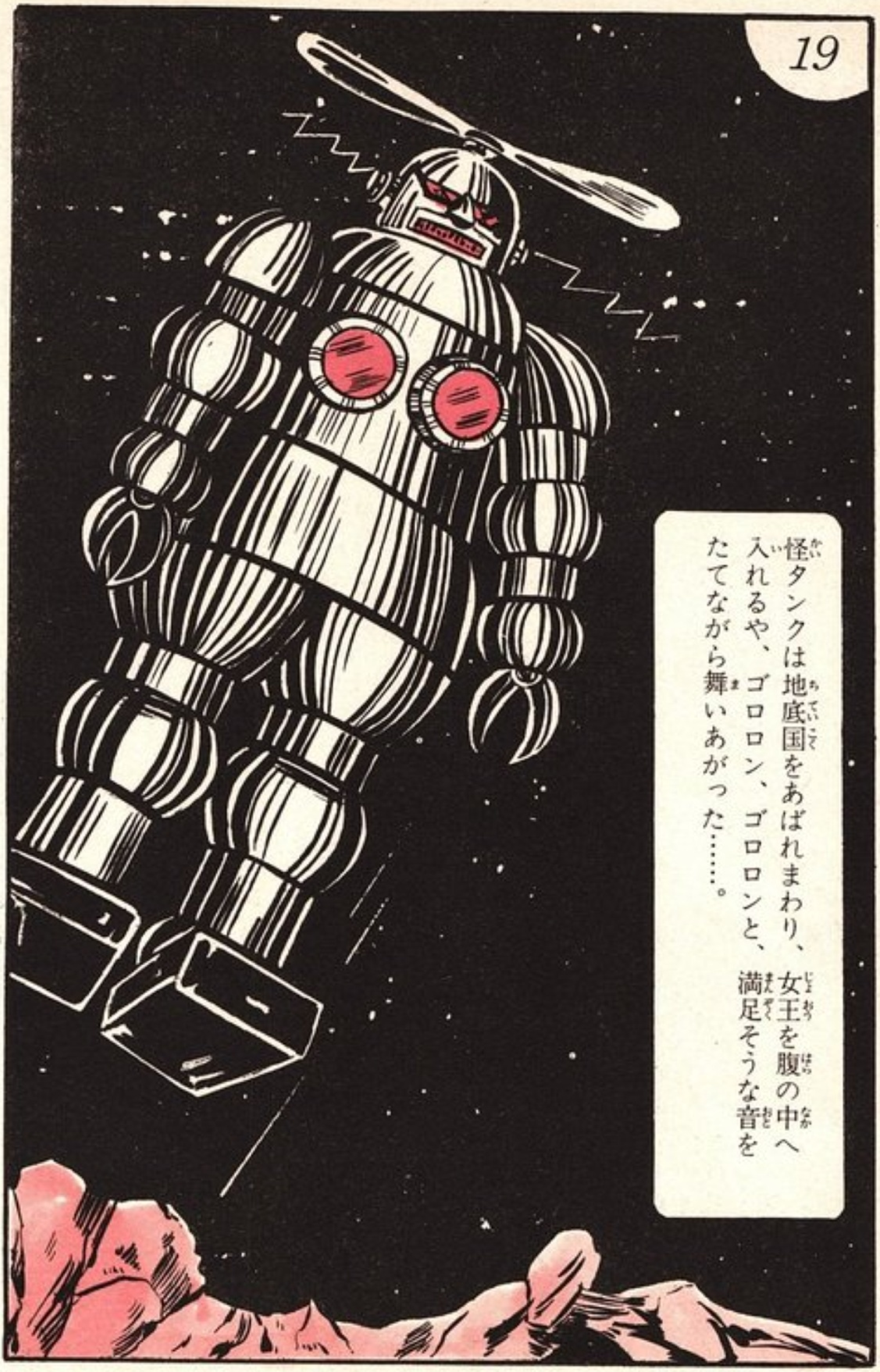

おお、見よ！ 美しい地底国の建物を、おもちゃのように踏みつぶし、ずしりずしりと進む怪タンクこそ、ナゾーの配下ドブロクスキー博士が知恵をしぼってつくりあげたものである。
やっ！ おれたちを大きくしたようなお化けがでた


16
地底列車を、あめのようににぎり
つぶし、地底国をあばれまわる怪
タンク……。

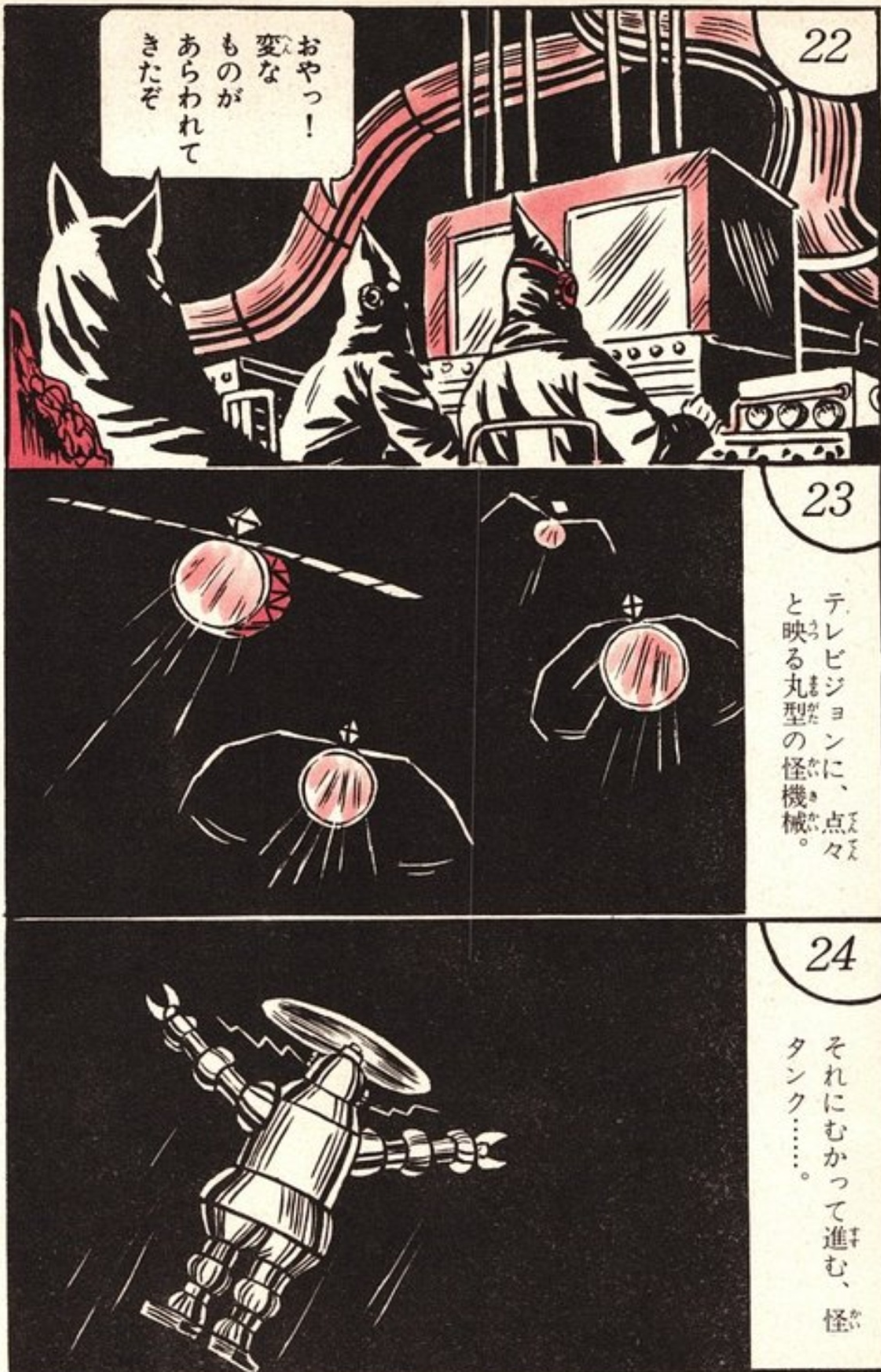

女王にせまる大きな鉄のつめ。
女王さま
あぶないっ！
あれーっ

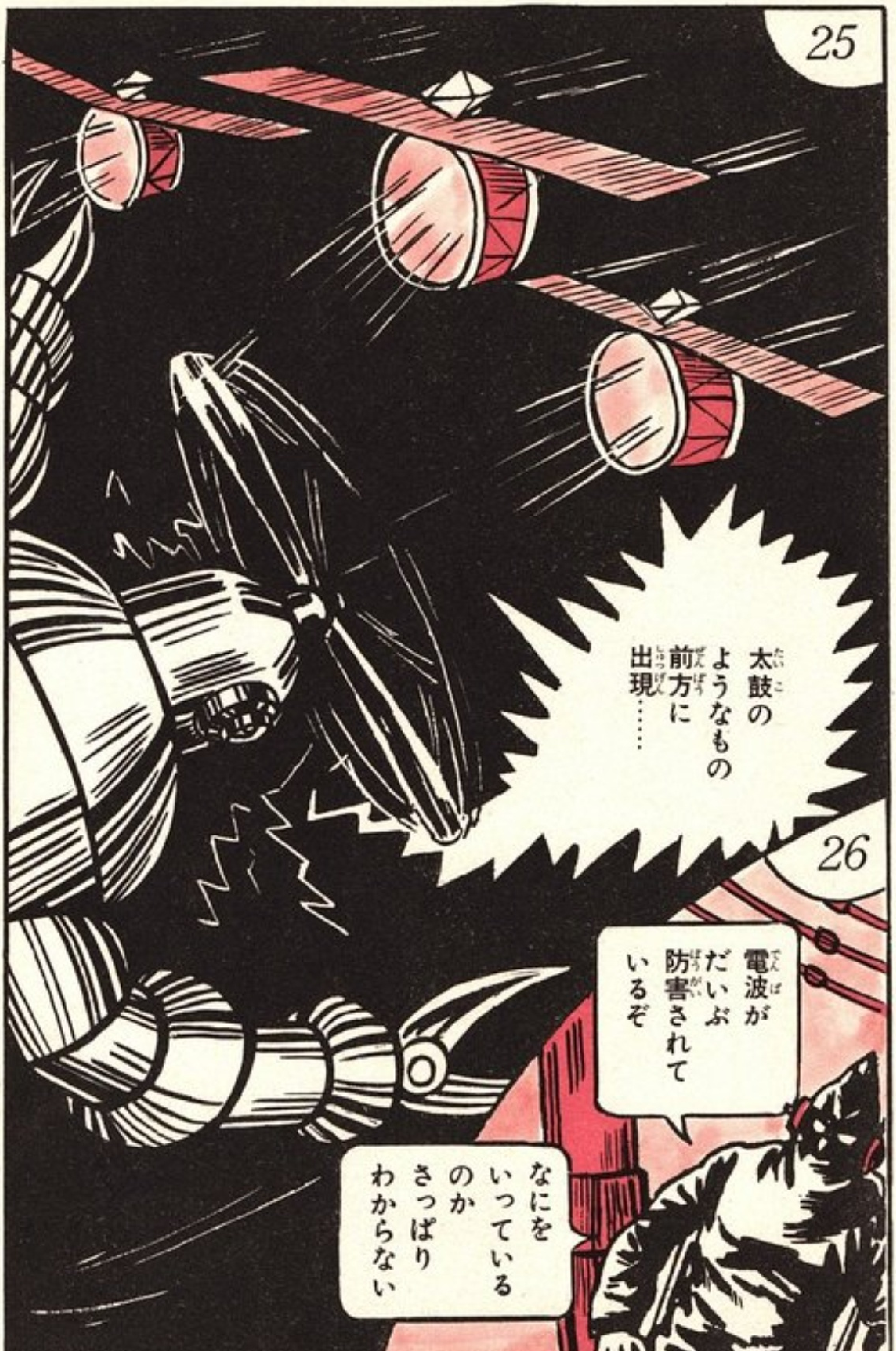

17
鉄のつめは女王をわしづかみにして、つりあげていく……。


18
あわれ！　シマ女王は、怪タンクの口の中へ放りこまれてしまった……。

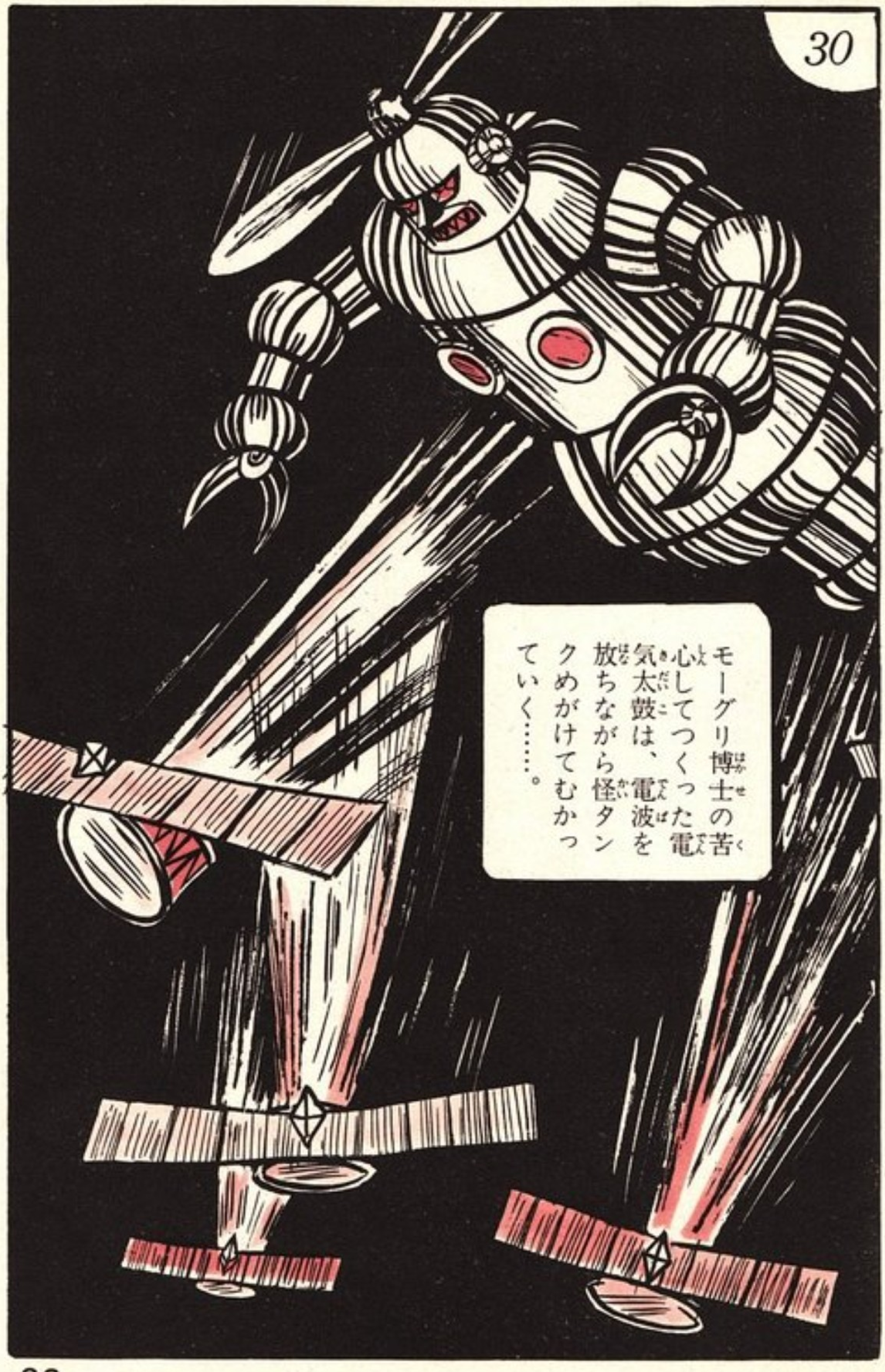

19
怪タンクは地底国をあばれまわり、女王を腹の中へ入れるや、ゴロロン、ゴロロンと、満足そうな音をたてながら舞いあがった……。

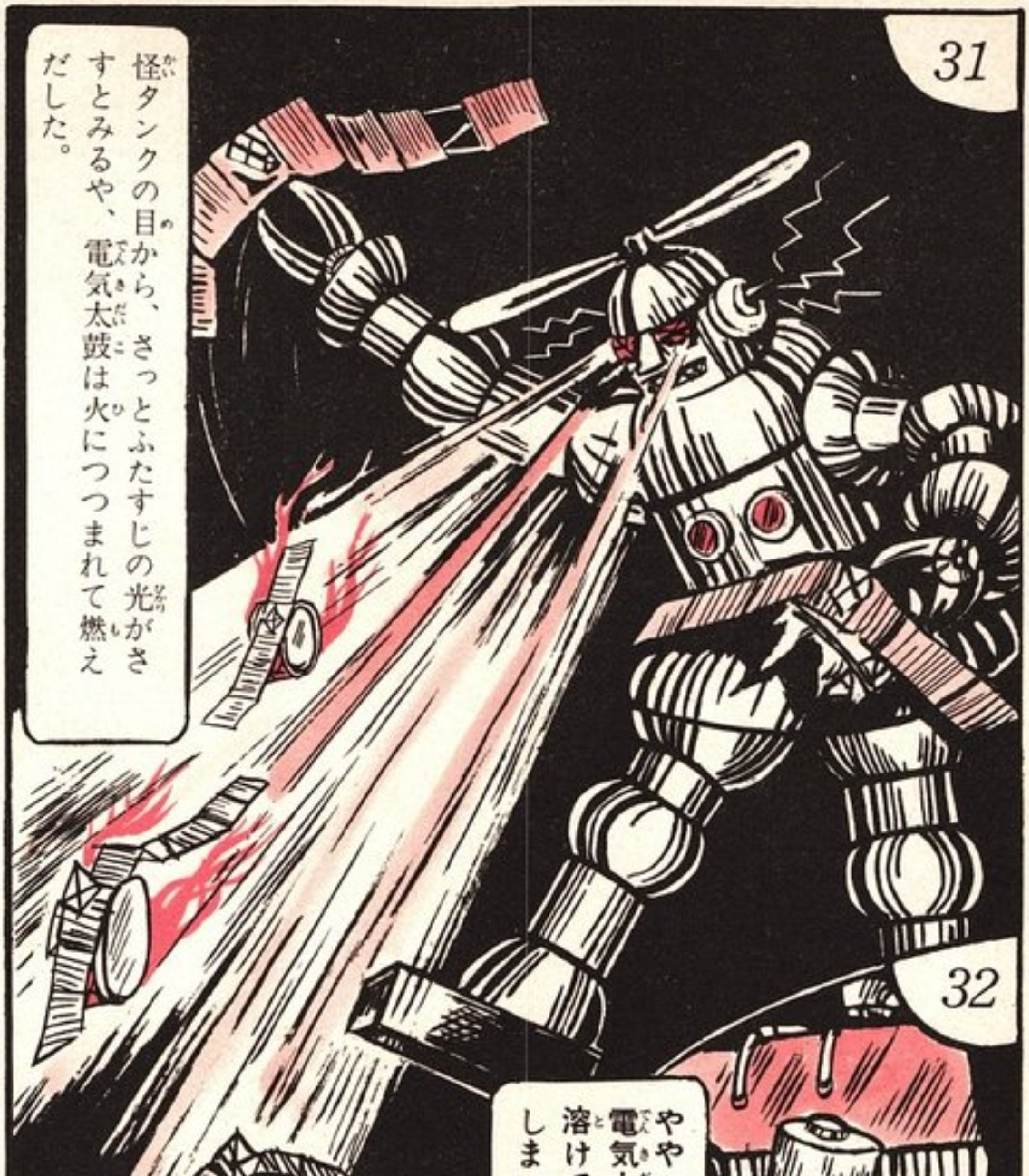

20
怪タンクはどうじゃな?
ドブロクスキー先生の発明ですもの成功することはもちろんよ
大成功と電信がはいりましたぜ
21
テレビジョンでようすを見ましょう

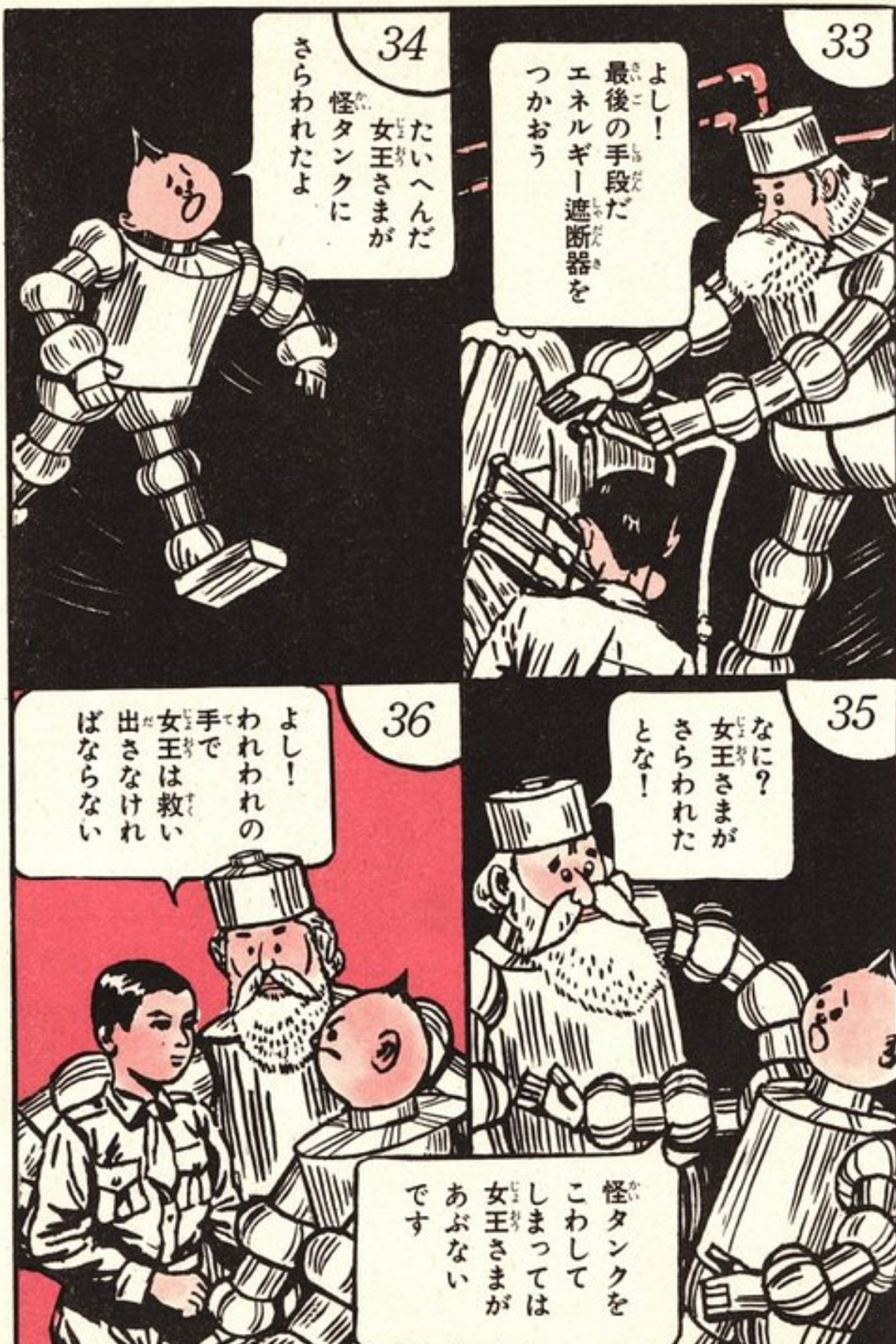

22
おやっ！変なものがあらわれてきたぞ
23
テレビジョンに、点々と映る丸型の怪機械。
24
それにむかって進む、怪タンク……。


25
太鼓のようなもの前方に出現……
26
電波がだいぶ防害されているぞ
なにをいっているのかさっぱりわからない


27
その太鼓のようなものと戦いをはじめたとみえるな
どうしても怪タンクと連絡がとれません
28
どこかに　やつらの仲間がひそんでいるのかもしれんな
しかし　地底国人がみんな逃げてしまったとすると　女王をつかまえればあとは　ろくなやついないはずだが変だぞ!
29
よしっ!　怪タンクが帰ってきたらもう一度地底国をてっていてきに破壊するように命令しなければならぬぞ

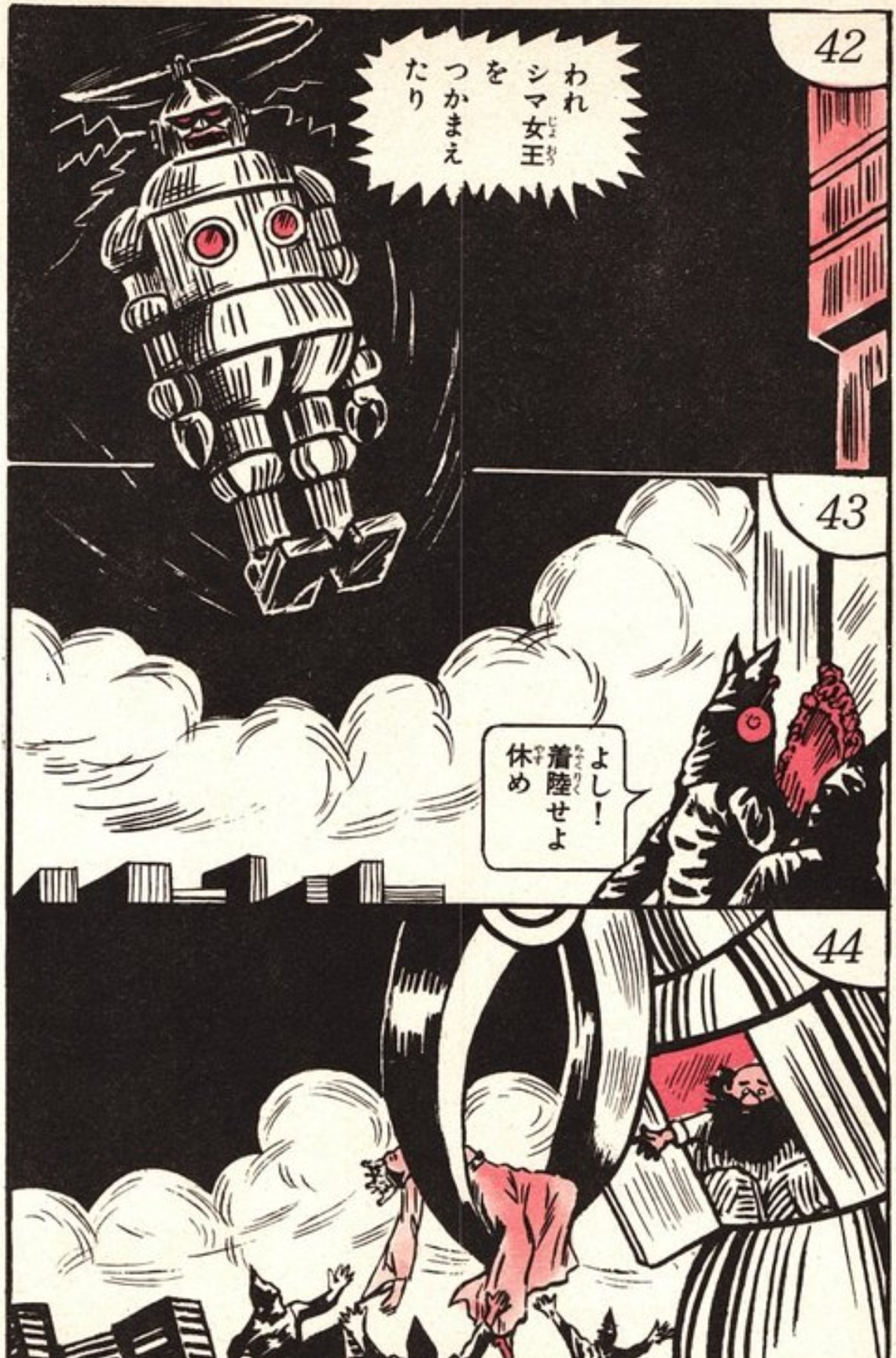

30
モーグリ博士の苦心してつくった電気太鼓は、電波を放ちながら怪タンクめがけてむかっていく……。


31
怪タンクの目から、さっとふたすじの光がさすとみるや、電気太鼓は火につつまれて燃えだした。
32
ややっ！電気太鼓が溶けてしまったぞ
電気より強い怪タンクの光線は何なんでしょうね


33
よし！最後の手段だエネルギー遮断器をつかおう
34
たいへんだ女王さまが怪タンクにさらわれたよ
35
なに？女王さまがさらわれたとな！
怪タンクをこわしてしまっては女王さまがあぶないです
36
よし！われわれの手で女王は救い出さなければならない


37
地底国人のいなくなった地底国の都へ、ナゾーは大いばりではいりこんできた。
38
女王はこんなりっぱなところに住んでいたのか
階段があるのぼってみよう
39
なかなかよくできた地底国だ

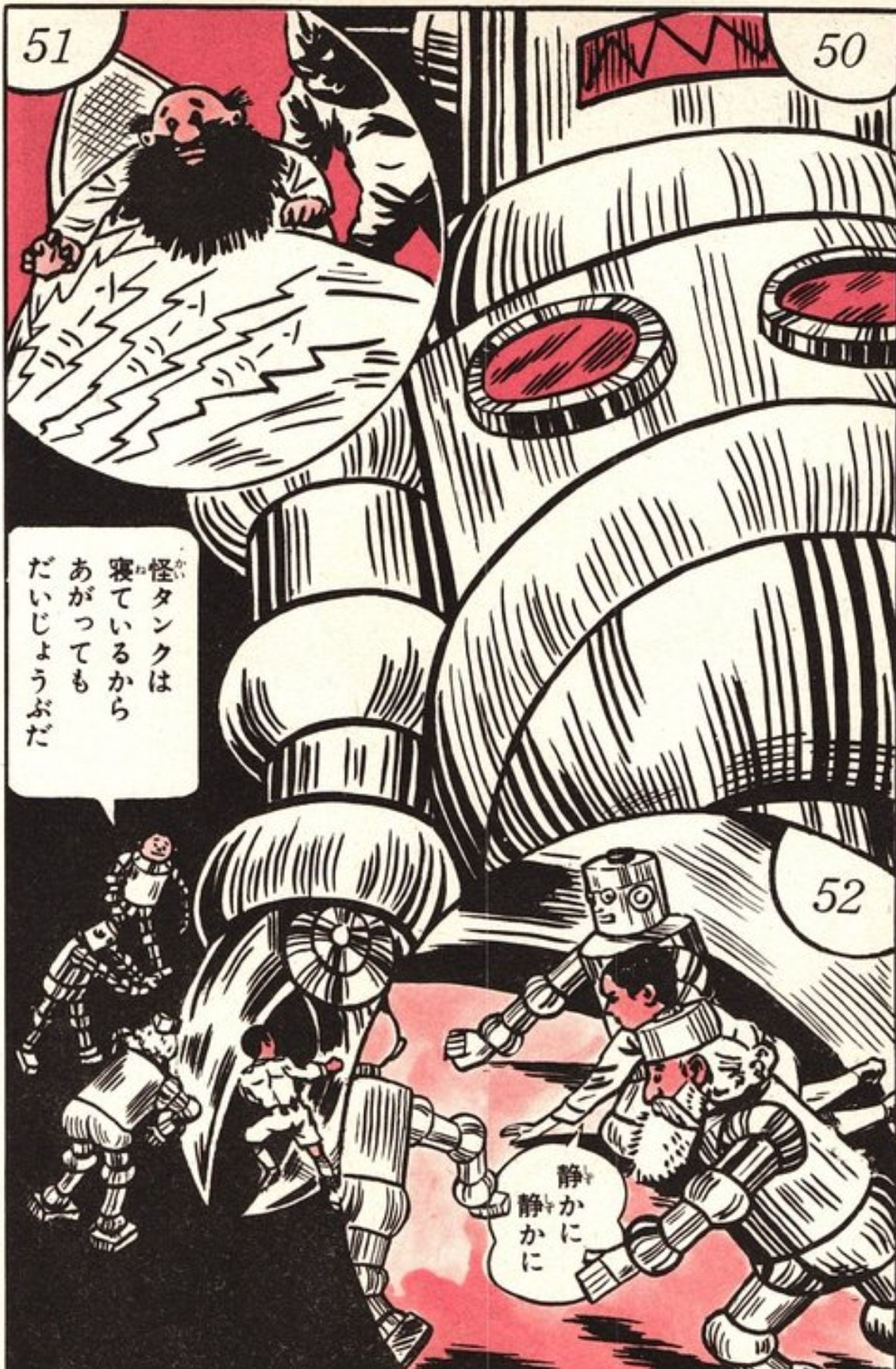

40
おお怪タンクが帰ってきたぞ
41
おかしら受信機を耳にかけてください

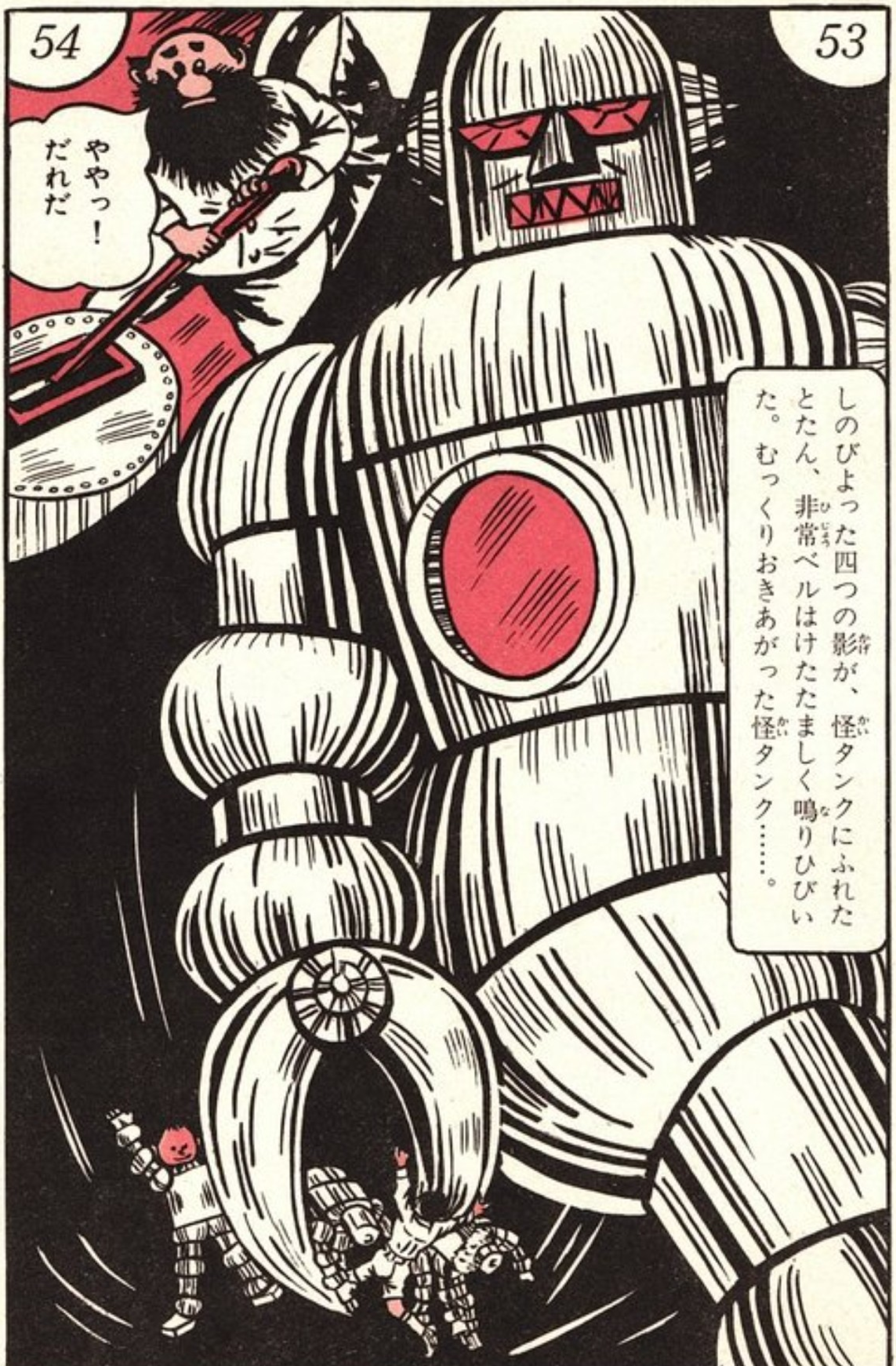

42
われシマ女王をつかまえたり
43
よし！着陸せよ休め
44


45
格納庫ができるまで外に置いておけ
女王が気がついたらつれてこい
おかしら怪タンクをしまうところがないよ

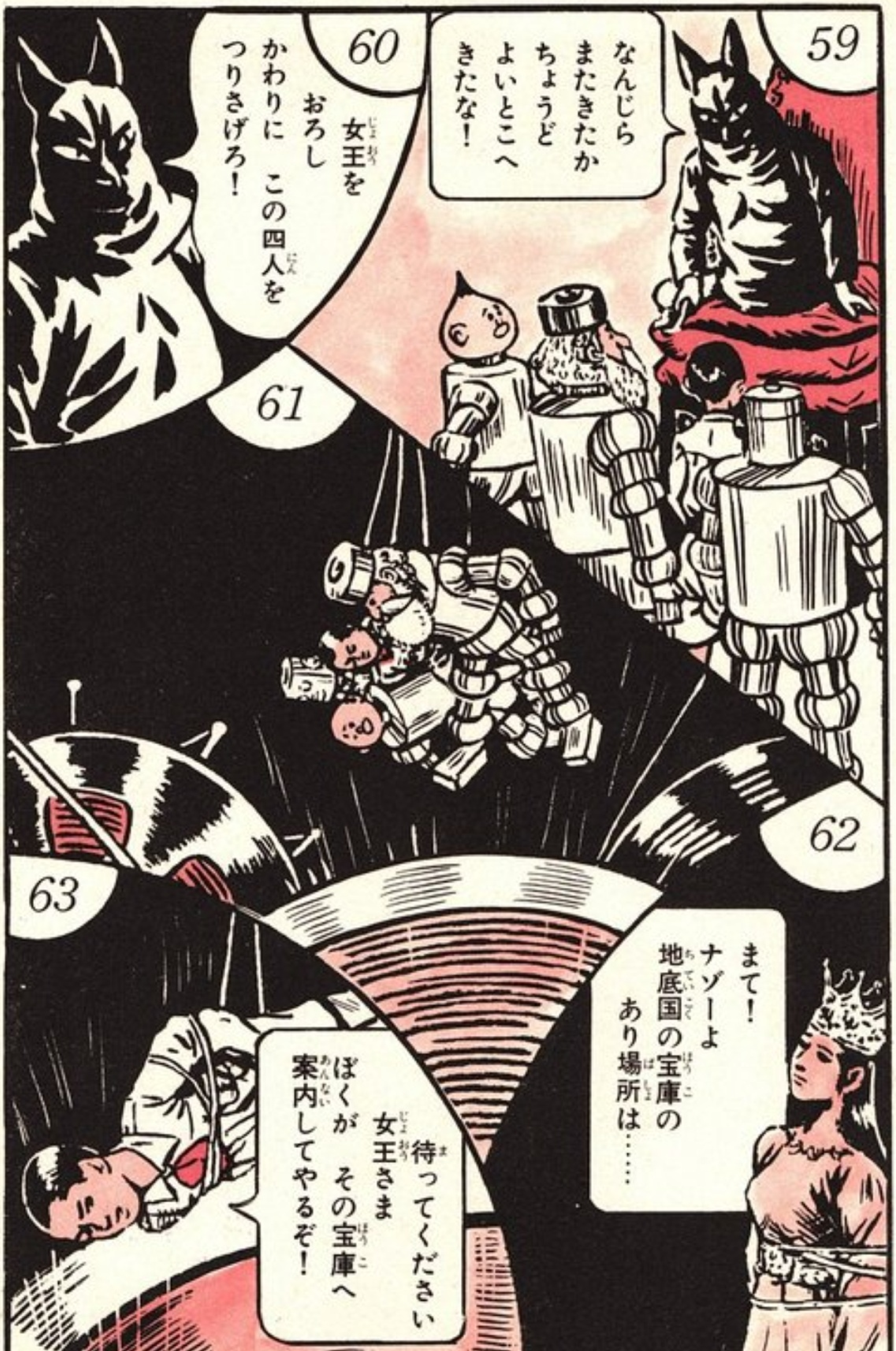

46
女王よ！おれはナゾーだおれは怪タンクをもっているぞなんじのもっている宝物をみなよこせ！
47
地底国人をどこへ逃がしたのか白状せい！大木や蛇王たちはどこにいるのかしゃべらなければひどいめにあわし地底国をぶちこわしてしまうぞ
ぞんじません
48
よしっ！白状しないなものども女王を牢に入れておけ
おかしら地底国には牢がありませんよ


49
寝ている怪タンクのそばへ、しのびよる黒い影。


50
51
52
怪タンクは
寝ているから
あがっても
だいじょうぶだ
静かに
静かに


53
しのびよった四つの影が、怪タンクにふれたとたん、非常ベルはけたたましく鳴りひびいた。むっくりおきあがった怪タンク……。
54
ややっ！だれだ

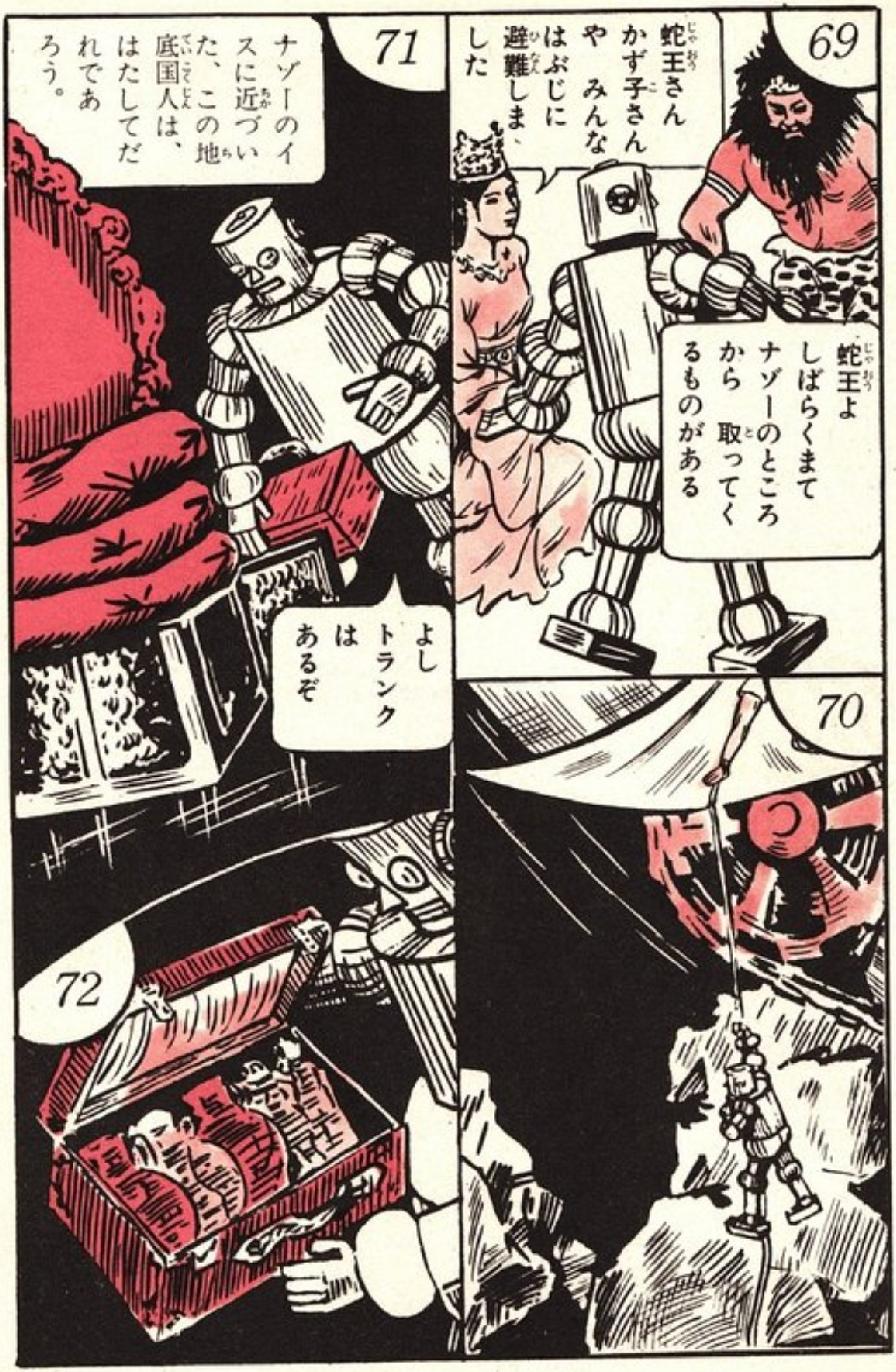

55
おかしら
牢がないから　し
ばっておきました
よし
またじん問する
56
地底国の宝物は
どこだ
57
女王よ
いわぬか
よしっ！
スイッチをいれよ
58
おかしら
ドブロク
スキー先生が
まさるたちを
つかまえて
きましたぜ


59
なんじら またきたか ちょうど よいとこへ きたな！
60
女王を おろし この四人を かわりに つりさげろ！
61
62
まて！ ナゾーよ 地底国の宝庫の あり場所は……
63
待ってください 女王さま ぼくが その宝庫へ 案内してやるぞ！

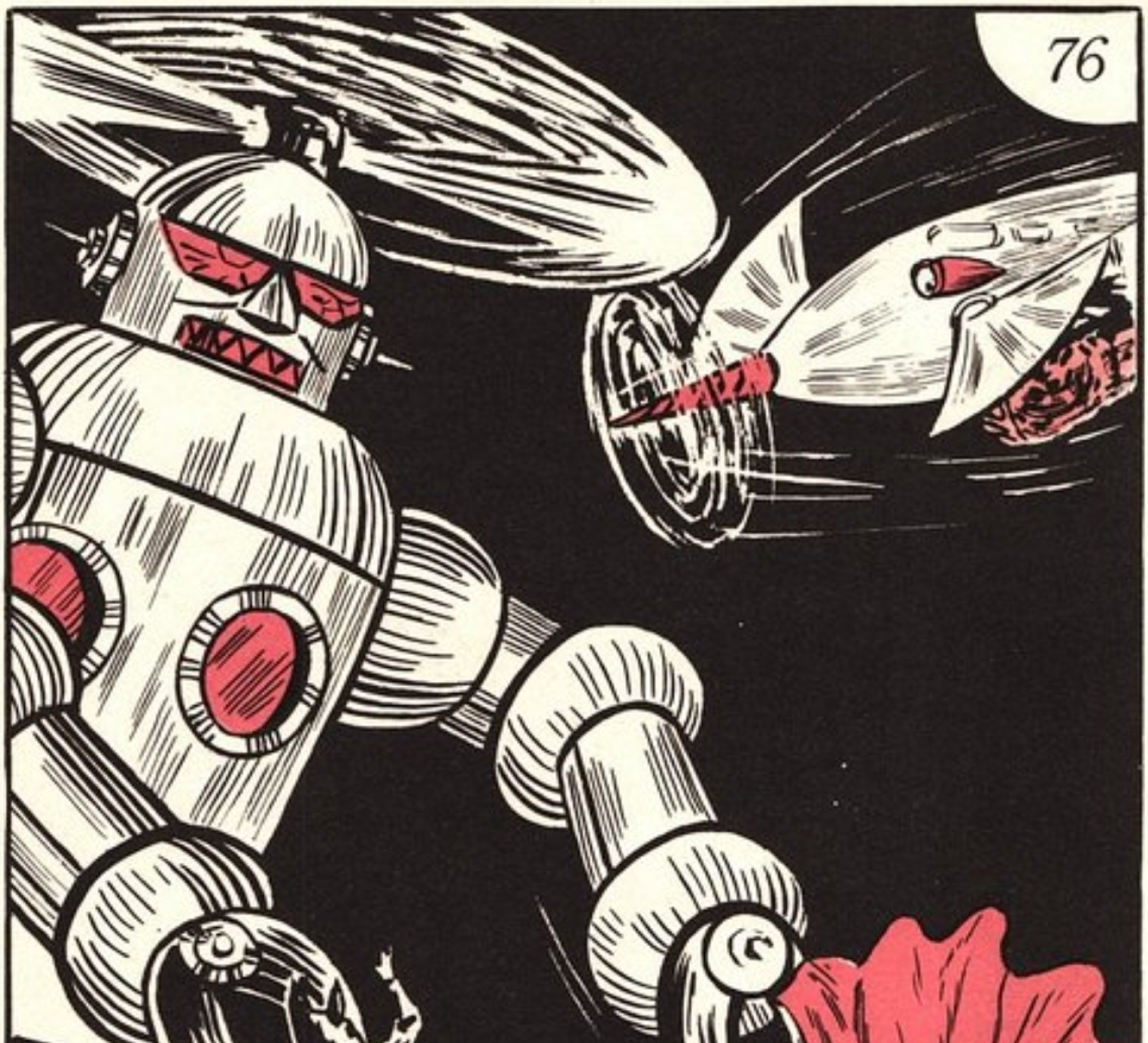

64
黄金バットのおじさん はやくきて
65
まさるの呼ぶ声の終わらぬうちに、さっと飛びきたった黄金バット、スイッチ係の黒覆面をうちたおした。
66
ややっ！黄金バット
うぬっ！まさるめだましたな


67
黄金バットが空の一角をさし招けば、地底工場の壁を破ってあらわれたG・M(グランド・モーグル)号。


68
G・M号は、四人のつながれたくさりを切って救いだした。黄金バットはナゾーをつるしあげて……。
さあはやくこれに乗ってください
黄金バットのおじさーんばんざーい
たいへんだおかしらが黄金バットにさらわれた
ドブロク先生にすぐ知らせろ


69
蛇王さん かず子さんや みんなはぶじに避難しました
蛇王よ しばらくまて ナゾーのところから 取ってくるものがある
70
71
ナゾーのイスに近づいた、この地底国人は、はたしてだれであろう。
よし トランクはあるぞ
72


73
ドブロクスキーおかしらがさらわれたっ
74
なにっ！まだ失敗したか？
蛇王！ドアをひらけナゾーを放りこむぞ
75
うわっ！そのトランクを取ってはだめだ


76
このとき、突如怪タンクは活動をはじめ黄金バットからナゾーをとりかえしてしまった。ざんねん！


77
怪タンクは黄金バットをもつかまえようとした。怪タンクにいどみかかるG・M号！ 戦いははじまった。
怪タンクよ！にっくき黄金バットをはやくつかまえよ
蛇王よ！きょうはだまってひきあげよう

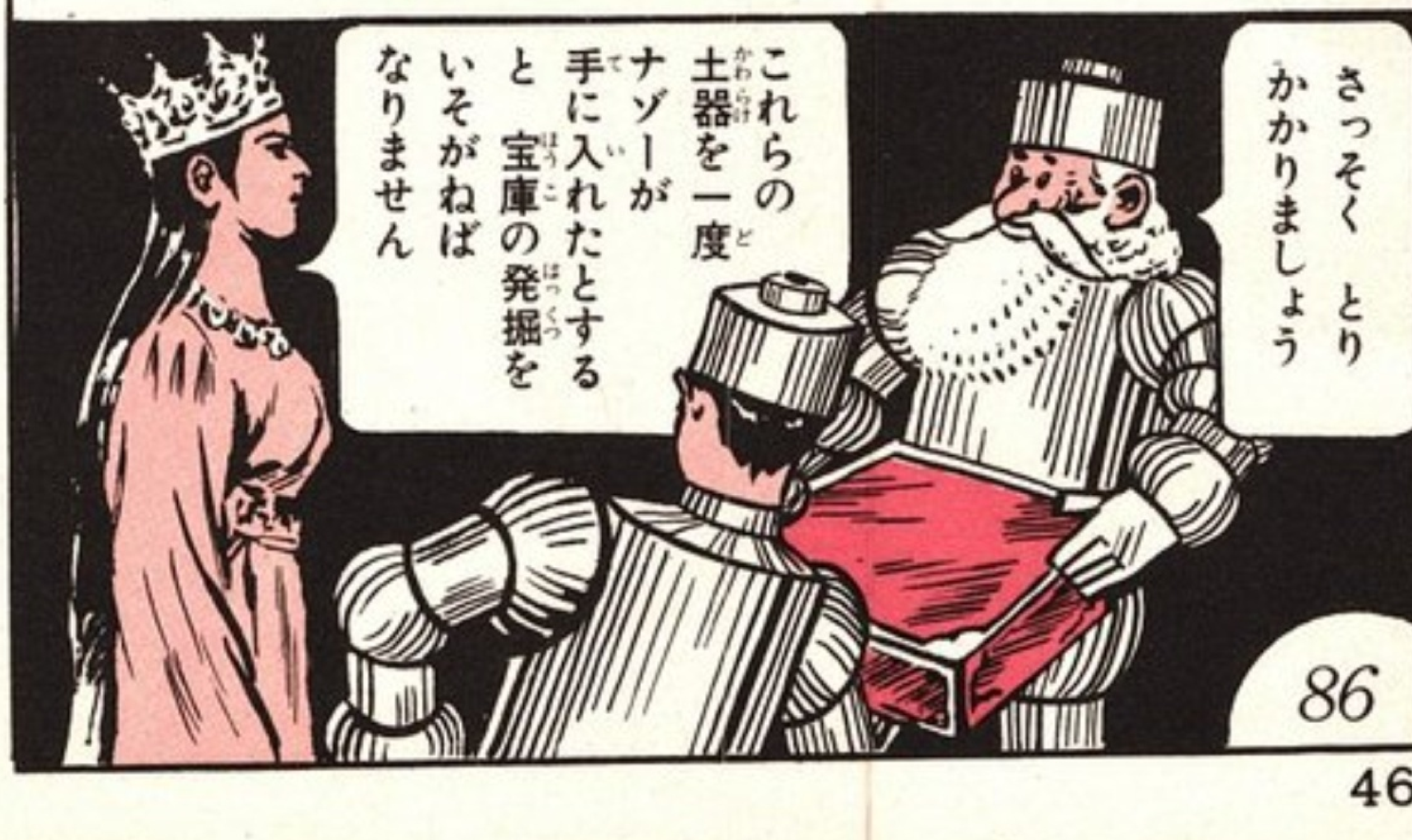

78
黄金バットが、ひらりとG・M号にとび乗ると、G・M号はいっさんにとびさった。そして、その後尾からふきだすモーグリガスは、あめのような壁を空中につくって、怪タンクは進むことができなくなった。
SOS
SOS
ややっ！ からだがねばって動きがとれなくなったぞ


79
蛇王さん おかげで たすかりました あなたは、どうして この機械に 乗ったのですか
地底人たちを ぶじに避難 させて 帰るとちゅう 黄金バットに 会ったのです ちょうど よかったのです
80
女王も救い だせたし 地熱エネル ギー遮断機を つかったら どうかな
よし！ ナゾーを うちこら さねば ならぬ
すてき すてき
81
黄金バットは また あらわれるであろう
さらば 諸君よ 悪をこらす ために 全力をつくす がよいぞ


82
みんなに別れを告げて、黄金バットはG・M号から飛び去った。はたして、黄金バットはどこへ行くのだろう……。
83
この土器はいかなる謎をひめているのであろうか
84
女王よ 地底国の祖先が残した 宝庫のあり場所をかいた土器はこれではありませんか
おお あなたは大木さんよくそれを 見つけてくださいましたお礼をもうしますトランクにはいっていたのですね
まさしくそれこそわれわれの祖先のものだ

85

大昔、地底におりたこの国の祖先シマ族は、地底国の東の方に金、銀、宝石をふくむ大鉱脈を見つけた。それからまもなく、それをよこどりしようとしてモモンガー族がやって来たので、シマ族はそのあり場所を七つの土器にかきのこし、その宝庫へ行く地底の道を埋めてしまった。そして、その文字の読み方をしるした羊の皮は、シマ族に残されてあった。それがのちになって、その一部をモモンガー族にうばわれてしまい、また、七つの土器もちりぢりになって、いまシマ女王の手もとに残ったのは、ただ二つだけであった。
ゆくえがわからなかった五つの土器が、いつか、モモンガー族の子孫のナゾーの手に渡っていたのだが、大木探偵の努力で、女王のもとに返ることになったのである。




87
蛇王よ エネルギー遮断機のところへおろしてくれんか
好調ですわい
モーグリ博士と黄金バットの合作G・M号はすばらしい
88
地底国の南のはし、モーグリ博士の工場地帯は、さいわいにも怪タンクの破壊からまぬがれて残っていた。そこにエネルギー遮断機はそなえられている。G・M号は、その上にとまった。


89
90
ギイーッ、モーグリ博士の手は、エネルギー遮断機にかかった……。
91
ば　ばかめ！まがぬけているから大失敗だ土器までとりもどされてしまったじゃないか怪タンクですぐあとを追わせろ
92
怪タンクが、まさに出発しようとしたとき……。


93
おおっ！　このとき、エネルギー遮断機の動きははじめられた。恐るべき零下二百度の寒さが地底国をおそったのである……。
寒い！　冷たい！
たすけてくれーい！
94
おお　冷たい！
わたしゃ
凍ってしまうよ
手も足も
きかなく
なってきた
95
エネルギーをとめられた寒い地底国で、ナゾーたちはどうなったであろうか？
寒さはますます強くなる……。


96
「ナゾーは、いまや敗北せり！　進め！　地底国の宝庫の開発に。まさるよ、蛇王よ、大木たちよ。さらに地底国のシマ女王にモーグリ博士よ。」と、高らかなさけび、それは、永遠に正義の味方黄金バットの激励の声であった。いまや、世界の平和のために、地底国の宝庫は開かれるのだ。
G・M号は、喜びを乗せて、地底の宝庫めざして進んでいく。


黄金バット
第三話 天空の魔城


1
地底の国のモーグリ博士によって、地熱エネルギーを止められてしまった地底国は、氷と雪にとざされた恐ろしい寒冷地獄となってしまった。それを防ぐ方法を知らないナゾー一味は、いまや零下二百度の寒さの中にとじこめられ、あわや、こごえ死にの一歩てまえまで、追いつめられてしまったのである。地底の国のシマ女王や、地底国人は、第二地底国に移り、G・M号（グランド・モーグル号）は、地底の大宝庫めざして進んでいる。


2
ドブロクスキー博士の操縦する怪タンクは、全身を凍らせながらも、わずかに活動をつづけている。いまや、ナゾーたちの生きる希望は怪タンクひとつにかけられていた。
3
わあ!! 冷たい 窓を開けると死んでしまうわい 仲間はどうした
4
おかしら はやく 怪タンクに乗りこんでくだされ お熊さんも お光さんも はやく はやく


5
ドブロクスキー先生のおかげでたすかったよ　わたしはもう　寒くて　寒くて　こごえ死ぬかと思ったよ
この中はずいぶんあたたかいのね
我々の負けだ　ひとまず地上へひきあげよう
6
怪タンクの中だけは温度を　上げたり　下げたりできる　装置が　ほどこされてある
地底を突破するから　ゆれますぜ　みんなしっかりつかまって　気をつけてくださいよ
7


8
ゴロロン、ゴロロンと、岩石をくだきながら、怪タンクは地中を突破していった。
9
お熊 今度は 失敗したな!! 地底の宝庫を 手に入れそこなったわい
きっと モモンガー様の ばちが 当たったのだよ
10
蛇王や まさるは G・M号といっしょに 宝庫へ 向かったらしいぞ
あれ まあ!! それじゃ ぐずぐずして いられないよ


11
怪タンクは、地底を突進して海中に出て、ナゾー島の近くの海面に浮かびあがった。
12
そのとき、天空から白いくらげのようなものが、クルクル舞いながら落ちてきた。はて、これは何者だろうか？
13
あれ！変なものが落ちてきたぞ


14
はて！ きっかいしごく 今まで 見たこともないものだ 地底国の機械かもしれぬから 気をつけろ
おかしら 変ですぜ あいつはくらげのようにプカプカ浮いていますぜ さっそくつかまえましょう
15
16


17
怪タンクは、その大きな鉄の爪
をうまく使って、くらげのオバ
ケをナゾー島に引きあげた。


18
ナゾー島に引きあげられたくら
げの中からは、さらに不思議な
かっこうをした者が、ゾロゾロ
とあらわれてきた。


19
おまえたちは何者か？何をするために　このナゾー島へ来たのか
たすけてくださってありがとう！わたしたちは地球人ではありません天空の魔王星に住む空魔人です
ここにおいであそばすのは極悪無道のナゾーさまだ　わしは　ドブロクスキー博士だ　用件を話せ
20
おお　あなたが有名なナゾーさまですか　天空界にも　お名前は　知れわたっています　わたしどもは　おりいって空魔大王からの　おねがいを　もってまいった者です
よくわかった　われらは　黄金バットのために　苦しめられている空魔大王のたすけがえられるならさいわいだ


21
きみたちが乗ってきた　あのくらげのお化けのようなものはいったい何だね
ああ　あれは　空魔人が　天空を飛ぶときに使う「プヨ」という機械ですよ　あれは　のびたり　ちぢんだりする　特別の合金でつくってあるのです　だから　だれでも乗れるようになっています
22
それから　空魔人の口と耳は　どこの国のことばでも　しゃべれるし　また　聞くこともできる　特別のしかけが　してありますから　あなたがたとも　お話しができるのです
魔王星に住む空魔大王は　天空界の　おひとよしの　ばかものたちをたおして　天空界を　自分のものにしようと　しているのですが　いろいろ　じゃまがはいって　思うようにならないので　地球で名高い　ナゾーさまのお力を　ぜひ　かりたいとこう　もうしております　それに　魔王星のプヨは　燃料にコーカスを使っているのですが……
空魔大王が　わたしに　願いというのは　どういうことなのかね　また　きみたちの乗ってきたプヨは　何を燃料に使って空を飛ぶのだい


23
魔王星には　もう　このプヨに使う　コーカスが　なくなってしまったのです　ところが　地球を　調べた結果　地球の　地下三千メートルの　ある場所に　コーカスをふくむ　大鉱脈があることがわかったので　われわれは　ナゾーさまの　お力をかりて　それを　手に入れたいのです　プヨは　最後のコーカス数トンを　使ったのですが　それが　途中でなくなったために　墜落してしまって　あなたがたに　たすけられたのです
24
われわれも　黄金バットたちに悩まされているので　空魔大王と　力をあわせることができれば　これにこしたことはない　きみたちが　見つけだした　コーカスは　地底国のものだが　われわれも　それを　奪いたいと思っている　ただ　はっきりした場所がわからないために　地底国人たちが　すでに　一足はやく　掘りだしに向かってしまった　これをじゃまして　われわれの方に　奪いとるようにくふうしなければならない　何とか　いい考えはないか?

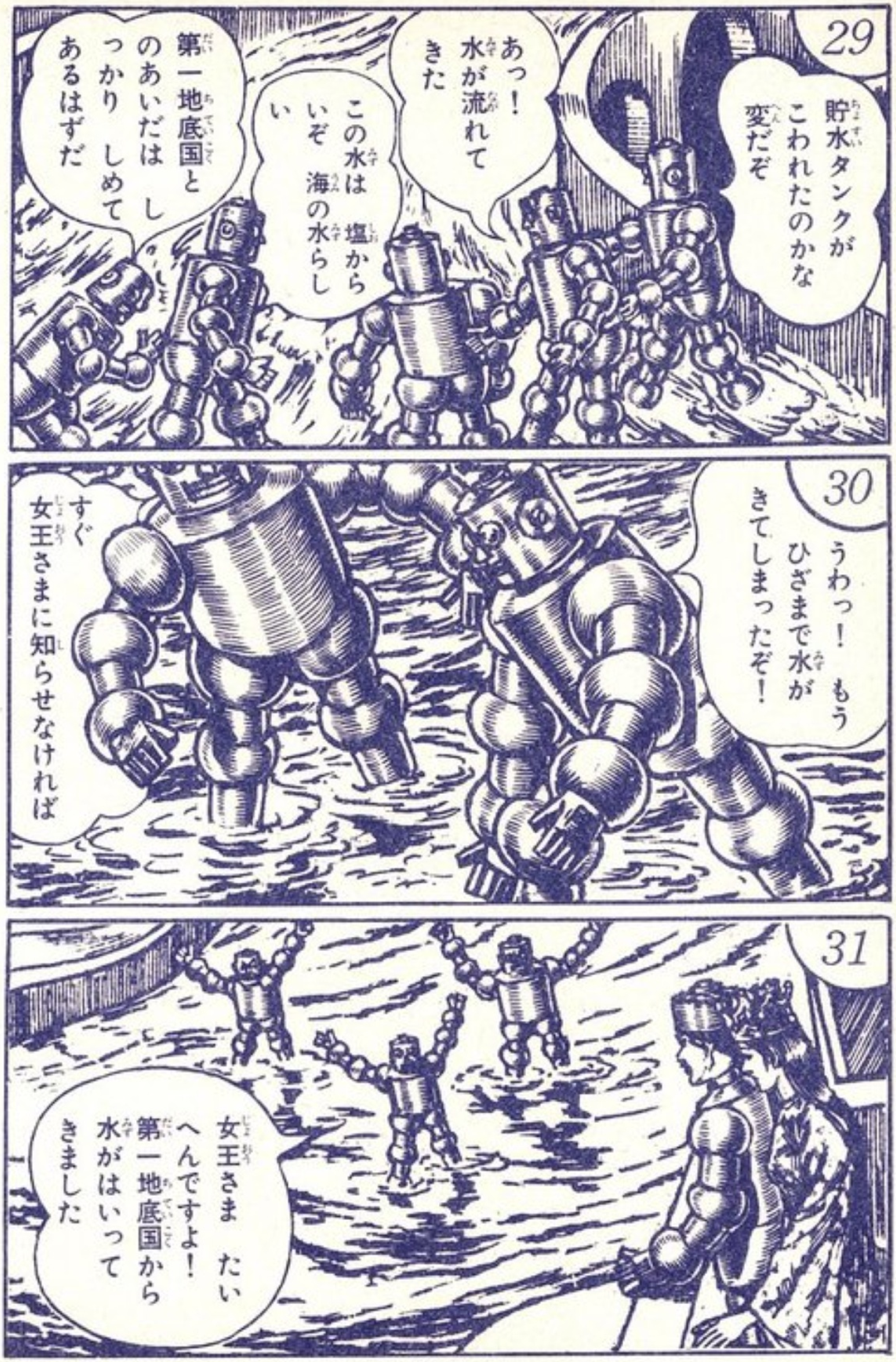


魔王星に住むターマ人は、ひじょうに進んだ科学を研究しているらしい。そのターマ人とナゾー国の善良な人たちを苦しめようとして、悪いはかりごとをめぐらしている。彼らの悪だくみは、はたして成功するだろうか？

正義の味方、黄金バットは、いまいずこにあるのか、ようとしてその勇ましい姿をあらわさない。

G・M号は無事に目的地に着いたであろうか。そして、地底国に残されたシマ女王や地底人の運命はいかに？　幾多の謎を秘めて、話は進められていく。


26
第二地底国で、シマ女王は、大木探偵といろいろな話をしていた。
ずいぶん遠いから たいへんでしょう みなさん 無事に 成功してくださると いいですね
女王よ G・M号は宝庫に もう ついたでしょうか
27
女王と大木探偵は、やわらかい人工の光を浴びながら、王宮から、人々の働くのをながめていた。
28
そう 何かあったのかしら ようすがおかしいですね
ごらんなさい 女王よ ようすが変ですよ 人々は 第一階段あたりで さわいでいます

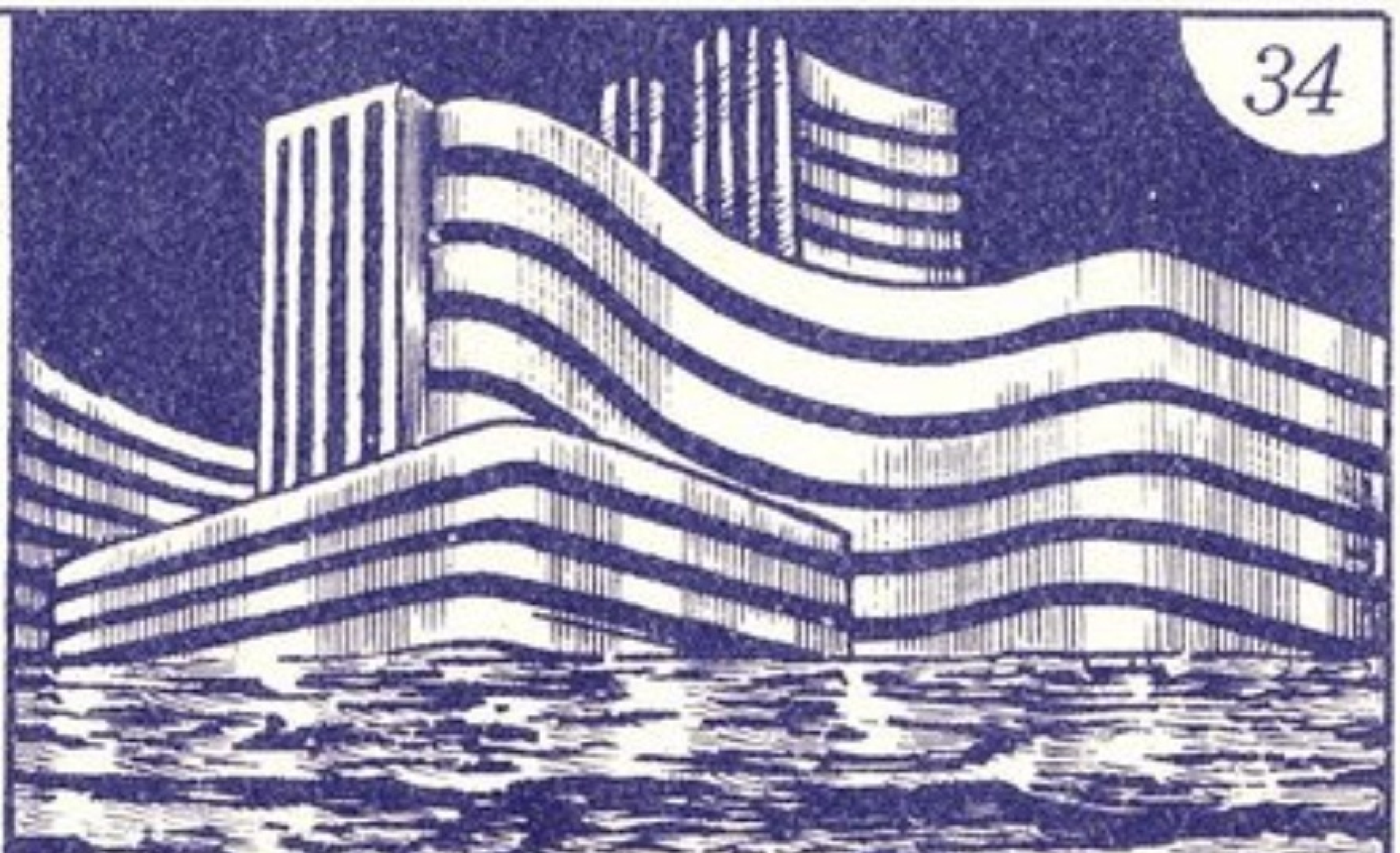

29
貯水タンクがこわれたのかな 変だぞ
あっ! 水が流れてきた
この水は塩からいぞ 海の水らしい
第一地底国とのあいだはしっかりしめてあるはずだ
30
うわっ! もうひざまで水がきてしまったぞ!
すぐ女王さまに知らせなければ
31
女王さま たいへんですよ! 第一地底国から水がはいってきました

怪タンクがのがれ去った穴から、恐ろしい勢いで、海の水がはいってきて、第一地底国をいっぱいにしてしまった。そして……。



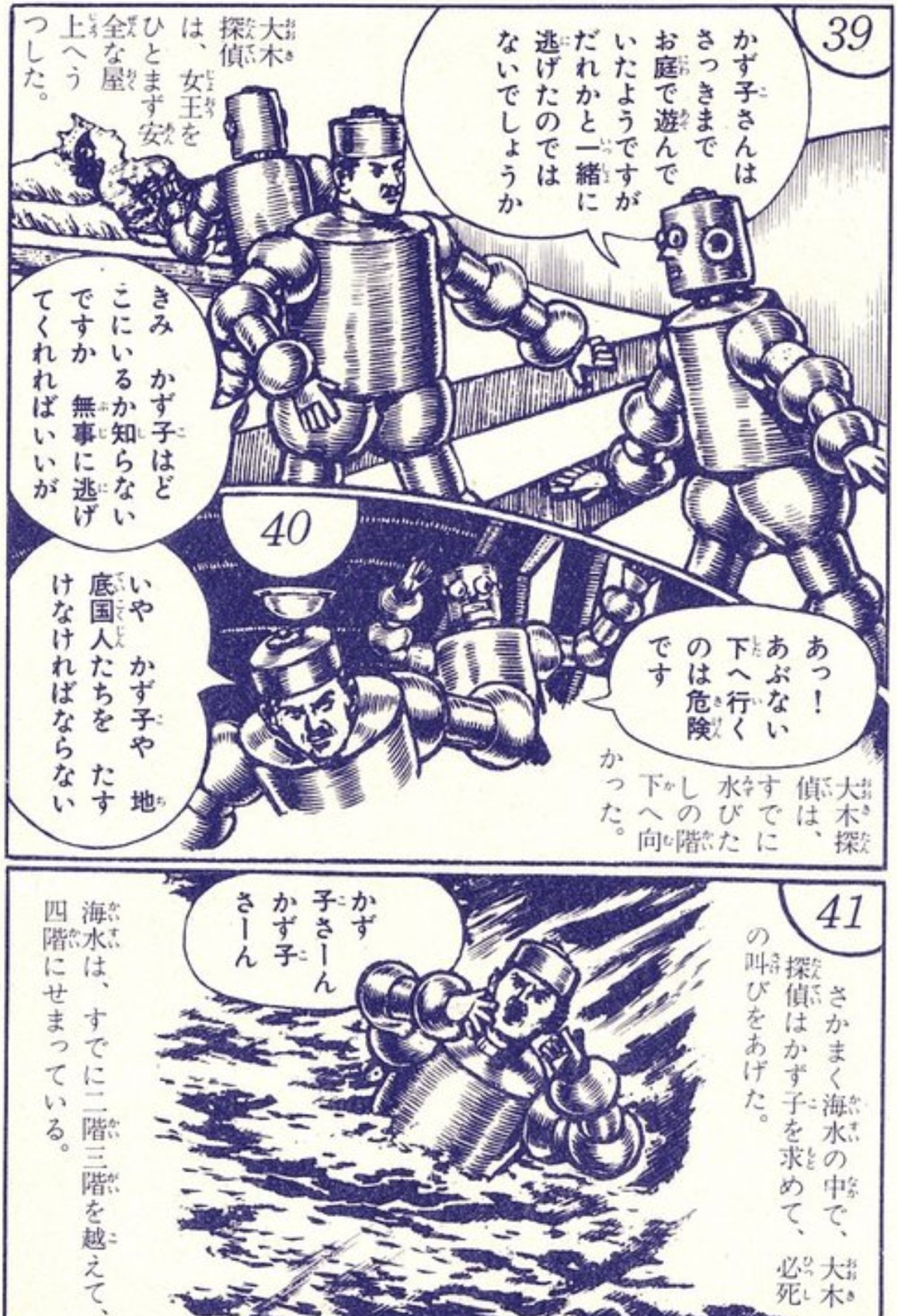


第一地底国にあふれた海水は、厳重にしめてあった第二地底国への入口の扉を破って、どっと第二地底国へ流れこんできたのだ。



壮麗をきわめた第二地底国も、みるみるうちに水かさを増して、はや王宮の階段も見えなくなってしまった。


35
わたくしのことより あなたがたがすぐ避難してください
女王さま 下は もう水でいっぱいです すぐ屋上へ 逃げてください
36
大木さん かず子さんをたすけてあげて!
37
と、叫びつつ、女王は気を失った。
38
女王さま しっかりしてください こんなことぐらいに 負けてはなりませんよ 地底国人たちを すくわなければ!
海水は刻一刻と増えてくる。大木探偵は、気を失った女王をつれて、階段をのぼっていく。


39
かず子さんはさっきまでお庭で遊んでいたようですがだれかと一緒に逃げたのではないでしょうか
大木探偵は、女王をひとまず安全な屋上へうつした。
きみ　かず子はどこにいるか知らないですか　無事に逃げてくれればいいが
40
大木探偵は、すでに水びたしの階下へ向かった。
あっ！あぶない　下へ行くのは危険です
いや　かず子や　地底国人たちを　たすけなければならない
41
さかまく海水の中で、大木探偵はかず子を求めて、必死の叫びをあげた。
かず子さーん　かず子さーん
海水は、すでに二階三階を越えて、四階にせまっている。


42
大木探偵は、かず子を救うべく、胸までせまる海水の中に飛びこんだ。
かず子さんに　もしまちがいがあれば　にいさんの倉田青年にもうしわけない
43
電気室の方より、かすかに、女の子の悲鳴が聞こえてきた。
たすけてくださーい　たすけてくださーい
あっ！かず子さんだ　かず子さんの声にちがいない
44
大木探偵は、窓を破って、へやの中に踊りこんだ。


45
かず子は王宮内の電気室で、小型受信機セットを、しっかり守っていた。これがなければ、地底国はいっさいの通信連絡ができなくなるのだ。
あっ！　おじさん　このセットを　ださなければなりません
46
かず子さん　ありがとう　よくそれを守ってくれました　いまたすけにいきます
47
さあ　階段のところまで　しっかり　泳ぐのですよ　すぐ近くですからね
だいじょうぶです　おじさんこそ　重い物を持ってるから　気をつけてね
ごうごうたる海水のうずまく流れは、必死になって泳ぐ大木探偵とかず子を押し流そうとするのであった。


48
気を失っていた女王は、ややしばらくたって気がついた。
ああ 大木さんや かず子さんは どうしましたか？ 地底国人たちは 無事に避難ができましたか？
大木さんは かず子さんを救いに行きました 拡声器が使えないので 連絡がとれません
49
第二の地底都市はごうごうたる海水にのまれて、地底の人たちは、あっというまに押し流されていく。
地底人は、いままで水害にあったことがないので、どうしてよいのかわからなかった。
50
王宮の下を押し流されていく、地底人のあわれなありさまをながめて、女王は気も狂いそうだった。おお！罪なき平和の人民たちを、海水のために死なせなければならないのか？


51
女王さま　電気室に水がはいったため　この国の活動が　止まってしまいました
あの大勢の人たちを救うことが　できないのでしょうか　すぐ治安委員を集めてください
52
あっ　あんなに苦しんでいます　はやく　王宮の屋上に避難させてください
皆　高いところへ逃げろ
たすけてくれ！　もう　だめだ
53
かず子さん　もう　ひといきだから　がんばってください　おじさんの肩につかまりなさい
おじさん　わたし　もう　疲れて泳げませんわ


54
その頃、G・M号は、地底の宝庫めざして、まっしぐらに進んでいたのである。
55
はやい はやい 痛快だ なあ
よしっ 最後のコースだ さあ 無事にゴールインだ
先生 距離計の 目盛りでは 目的地まで あと五十キロ ですぞ
56
ジージー、まさるの小型ラジオが鳴りだした。あっ！黄金バットのおじさんからの通信がきたのだ。
おお、なつかしい、黄金バットのおじさんの声は、地底の国の危機を告げているのだ。
57
まさるよ G・M号は ただちに 地底国へ 引き返せ 地底都市は いまや 海水により 女王や 住民は 危険に ひんしている なんじらは 地底人を 救わなければならない

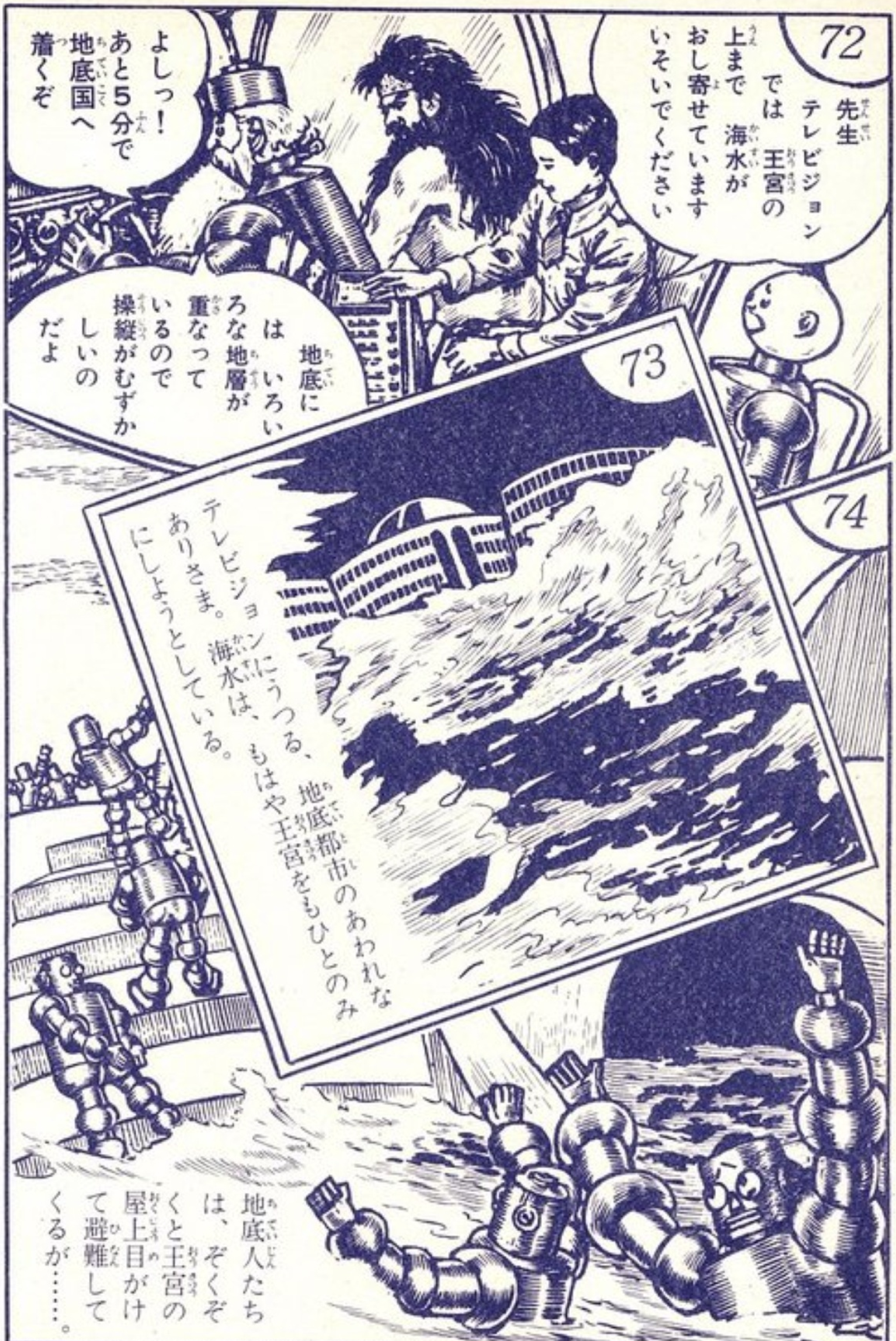

58
59
先生 たいへんです 地底国が 大水害に おそわれていると 黄金バットの おじさんが 知らせて くださいました
なに!? それは一大事だ ナゾーたちの しわざにちがいない すぐ 引き返さねば なるまい
60
G・M号は目的地を目の前にして、地底国に引き返すべく、進路を変えた。


61
地底国を救うべく、G・M号は超スピードで、岩や石をはね飛ばして進んでいく。
62
いくらダイヤルをまわしても通じない　地底国は全滅したのではあるまいか?
まさるは地底国と無電の連絡をしようとしたが、だめであった。
63
まあ　よかった　おふたりとも　大切な地上のお客さまですからね
女王さま　よろこんでください　大木さんとかず子さんが　セットをもって　無事に帰ってきました
64
かず子さん　もうだいじょうぶだ　階段が見えてきた　六階から　上はまだ　水がきてないからね


65
66
あっ　地底国と連絡が　つきました　おとうさんの　声が聞こえてくる
G・M号は　地底国に　向かって　いそぎ　引き返しつつあり　第三号大道路に　到着の予定なり　海水をQ火山噴火路に流す手段をとりつつあるゆえ　安心せられたし
万事わかった　海水は　すでに王宮の　屋上にせまり　危機　さらにせまる　いそぎ救いを求む
67


68
ウワー恐ろしいなー ぼくたち溶けてしまわないかなー
Q噴火山の真下に近づきつつあり さらにスピードをあげますよ
69
まさるくん プクちゃん いよいよQ噴火路を突破するから気をつけてくださいよ
G・M号は、超スピードでQ噴火山の噴火口に向かって進んでいった。赤々と燃えたぎる溶岩を目がけて……。


70
地球の中心から、白熱した溶岩を吹きあげるQ噴火口のまん中を、G・M号は、いまや突き抜けようとしているのだ。G・M号には、モーグリ博士のすばらしい発明によって、恐るべき高熱に負けない特別の装置がしてあったのだ。
71
まさるさん すばらしい G・M号ですね
噴火山路は ものすごいなあ! けれど G・M号の中は 少しも熱くないから 不思議だなあ


72
先生
テレビジョンでは　王宮の上まで　海水がおし寄せています
いそいでください
地底に　はいろいろな地層が重なっているので操縦がむずかしいのだよ
よしっ！
あと5分で地底国へ着くぞ
73
テレビジョンにうつる、地底都市のあわれなありさま。海水は、もはや王宮をもひとのみにしようとしている。
74
地底人たちは、ぞくぞくと王宮の屋上目がけて避難してくるが……。


75
おお！しかし、海水は屋上の人々のひざのあたりまでせまってきた。
76
皆 心配するな もうすぐ G・M号が 帰ってくる
77
間もなく 地底国へ到着の 予定なり！ G・M号は ただちに 海水を 国外に 流すゆえ 安心せられよ いま しばし お待ちを乞う


78
ありがたいぞ！ たすかったぞ！
海水がだんだん引いていくもう安心だ
おお、見よ。海水はみるみる引きはじめた。それはG・M号が到着して、危険をおかして地底国とQ噴火路をつなぐ、厚い岩壁を打ち破ったのだ。
79
ひとときもゆうよできない地底国のようすを、テレビジョンで知ったG・M号は、全速力でかけつけて、その巨大な歯車で、さしも堅固な地底国の入口を打ち破ってしまった。

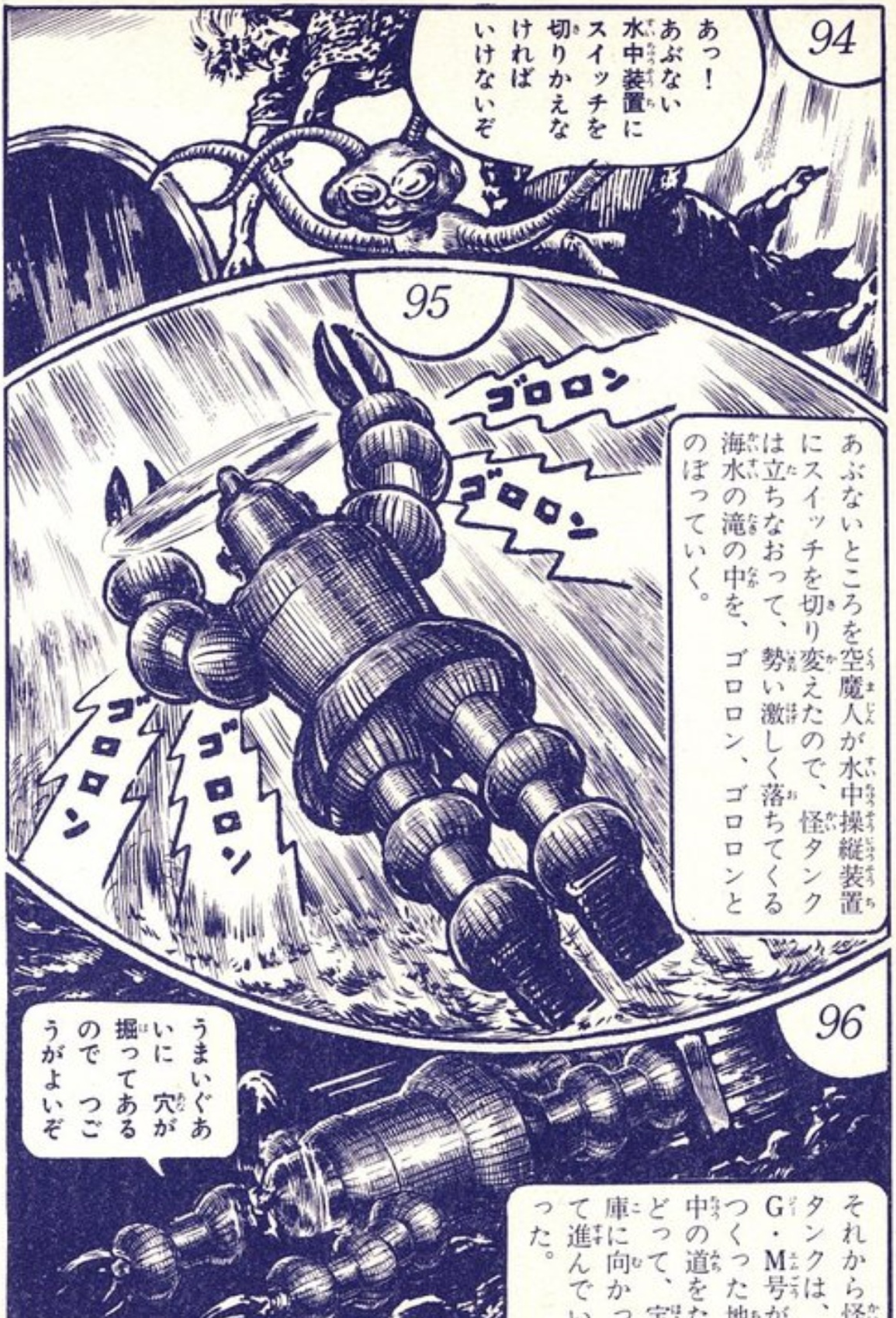

80
第二地底都市を埋めていた海水は、せきを切られてはげしい勢いで、どっと流れだした。
大海の圧力に押しだされ、海水は逃げ道を求めて、水煙をあげながらQ噴火路をめがけて、ごうごうと流れ落ちていった。
地球の中心までもつづく、底知れぬ噴火路へ向かって、海水は流れ落ちていくのであった。
81
おおっ! G・M号だ ばんざーい


82
女王さまも　おとうさんも　皆無事だ　よかったなあ
かず子さんも皆　元気だからぼくうれししいよ
83
何の知らせなの？
おや？　黄金バットの　おじさんからの　知らせだ　あっぐずぐずしていられないぞ
G・M号よ　使命を　終わったらすぐ宝庫へ　引き返せ　ナゾー一味も　宝庫へ　向かって出発した
G・M号は女王たちとことばをかわすひまもなく、ふたたび宝庫目ざして進みはじめた。
ナゾーたちに奪われてはたいへんだ
出発用意
前進!!
84


85
その頃、怪タンクもまだ、空魔人の案内で地底の宝庫目がけて一路、空を飛んでいた。ちょうどQ噴火山の上空で、空魔人はナゾーに呼びかけた。
86
ナゾーさま Q噴火口から はいりましょう それが 一番近い道です
よしっ ドブロクスキー博士よ もぐる 準備をせよ
OK 噴火口の 煙が 変だぞ
87
ブルルン、ブルルン！ 怪タンクは噴火口に突入していった。いつも黒煙を空高く吹きあげているQ火山も、この日に限り、白い煙をはいているのだ。


89
88
火の中にはいっていくから 冷却装置のスイッチを 入れておくれ
あいよ だけど 暖めたり 冷やしたり この機械は ずいぶん いそがしいね
怪タンクは、もうもうと白煙のわき立つQ噴火山の火口を目がけて、まっしぐらに飛びこんでいった。
90
ドブロクさん 温度はさげたけれど なんだかおかしいよ 外じゃ水の音が 聞こえているようじゃないかね


91
地底国から勢いよく流れ出てくる渦まく海水のまっただ中に、怪タンクは飛びこんでしまった。
お熊 外は水だ 溶岩ではないから温度をさげてはいけないぞ
うわー お熊 たいへんだ 操縦装置が動かなくなってしまったぞ
92
噴火山の中に水が流れているとは知らなかった。怪タンクは、激しい水の勢いに追い落とされ、内部の調節をあやまって、その機能を失ってしまった。水煙のまっただ中に、中心をなくした怪タンクは、もんどりうって落ちていくのである。
そして、怪タンクは、底知れぬ噴火口の奥底へと、まっさかさまに落ちていく。ナゾー一味の運命は……。
93


94
あっ！あぶない水中装置にスイッチを切りかえなければいけないぞ
95
あぶないところを空魔人が水中操縦装置にスイッチを切り変えたので、怪タンクは立ちなおって、勢い激しく落ちてくる海水の滝の中を、ゴロロン、ゴロロンとのぼっていく。
ゴロロン
ゴロロン
ゴロロン
ゴロロン
96
それから怪タンクは、G・M号がつくった地中の道をたどって、宝庫に向かって進んでいった。
うまいぐあいに穴が掘ってあるのでつごうがよいぞ

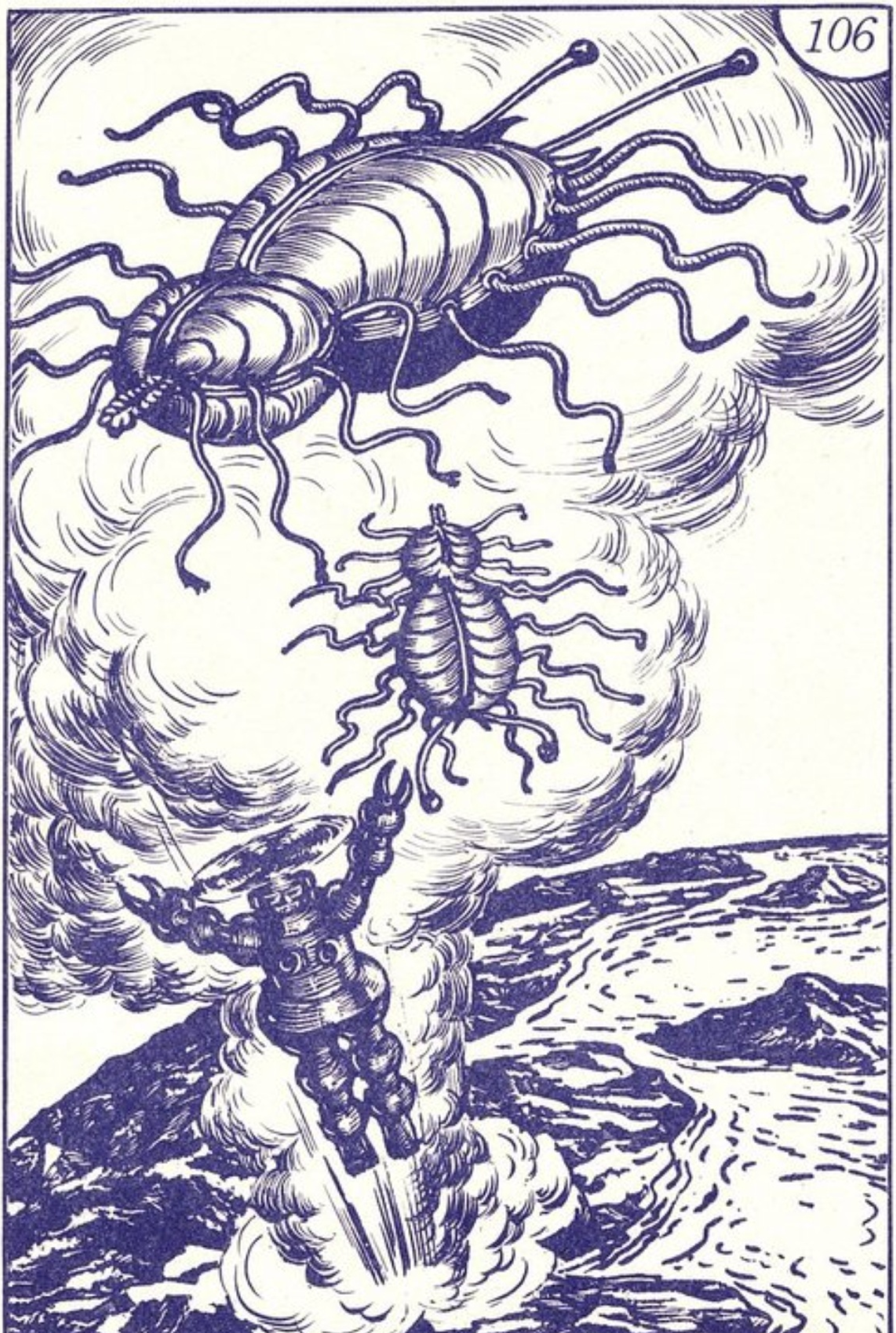

97
ついたぞ ついたぞ おお見よ この光さんぜんたる大宝庫を
98
何百メートルという厚い層をなして重なる金銀宝石の鉱脈が、いまや怪タンクの目の前にあらわれた。地底国のシマ族が持っている、このたくさんな宝物。
光り輝く金銀の山 宝石の層―― これで ナゾーさまは 世界一の大金持ちだ
99
いろいろな謎を秘めた地下の大鉱脈は、そのおごそかな姿を、いま悪者のナゾーの前にあらわしたのである。
おかしら 苦心のかいあって ついに宝の山に着きましたぜ ありがたい
おお このたくさんなコーカスよ これがあれば 空魔国は ばんばんざいだ


100
ナゾーさま　おかげでコーカスを手に入れることができて　こんなうれしいことはありません　われわれも　大いばりで　空魔大王のところへ帰れますよ


101
しかし　このたくさんなコーカスを　どうして運ぶのか？　その　くふうがついているのかな？
その点は　だいじょうぶです　われわれが乗ってきたプヨは　のびちぢみが自由にできるのです　プヨは　八台分用意してありますから　このコーカスを　持ちだすことくらいは　何でもありません


102
大じかけな略奪がはじまった。怪タンクは金銀宝石を奪いとり、プヨはコーカスをどんどん掘りだしていった。こうしてシマ国の人々のものであるこの地底の宝は、悪人どもに奪いさられていくのであった。


103
104
よし！だいぶ積みこんだようだ もうよかろう
ナゾーさま ありがとうございました さあ では いよいよ魔王星へご案内 いたしましょう 空魔大王も お待ちかねでしょう
105
うん これで われわれの望みは はたすことができた こんどは 魔王星へつれていってもらおうか しかし 怪タンクは魔王星まで 飛んでいけるだろうか
怪タンクは ある特別な装置をしなければ 空気のないところは 飛べませんから しばらくN島へ残しておきましょう 空魔人も ひとり残しましょう


106


107
ブヨの一群は、その機内にコーカスをいっぱい詰めこんで大喜びで、ぞくぞくと空へ舞いあがっていく。
108
一方、怪タンクはナゾー島へひき返していった。はたして彼は何をくわだてているのだろうか。
ゴロロ

109



みるみるうちに、小さく遠ざかっていく地球の姿。広い広い天空の百万億マイルのかなたに、魔王星は、かすかにあやしく光を放ってまばたいている。空魔人とともにプヨに乗りこんだ悪者ナゾー一味は、首尾よく地底の宝物を盗みだして得意になりながら、いま魔王星目ざして逃れさっていくのである。


110
その頃、G・M号は全速力で地中を突き進んでいた。そうして、ようやく目的地に着いたとき……。
111
おお！ そこに見えたものは……。無残にも奪いさられてしまった宝庫のうつろな抜けがらではないか。何やつのしわざか？


112
一足おそくなったためにナゾーにしてやられたか
うぬっ!! ナゾーのしわざだな ようしきっと取り返してみせずにはおかないぞ
113
奪いさられたあとを皆でよく調べてみると宝物の大鉱脈はまだまだ数限りなくあることがわかった。
やつらはまた引き返して運ぶつもりだろう そのときこそひっとらえてくれるぞ
ナゾーのばか こんなにあるのがわからなかったのか
蛇王さん宝物はまだまだ ものすごくありますよ
あまりたくさんなので持ちかえれなかったのだ
114
あっ!黄金バットのおじさんが 呼んでいる
ジージー
ジージー


115
「ウワッハッ、ウワッハッハッ！」
おお、勇ましい黄金バットの声が、
まさるの受信機に響いてきた。
「まさるよ、蛇王よ、博士よ、油断
するな。ナゾーは空魔人とともに天
空はるかなる魔王星に向かって、飛
びさったぞ。すぐさま、追いかける
がよい。」



プヨは大宇宙を飛んでいく。はるかな下を地球は、かすかに青白く星のように光っている。空気のない大宇宙は暗やみにつつまれ、ただ数限りない星が、きらきらとダイヤモンドをちりばめたように輝いているばかりであった。遠い、遠いかなたには、あやしい光を放つ魔王星……。その上に住むという空魔大王とは、何者であろうか。

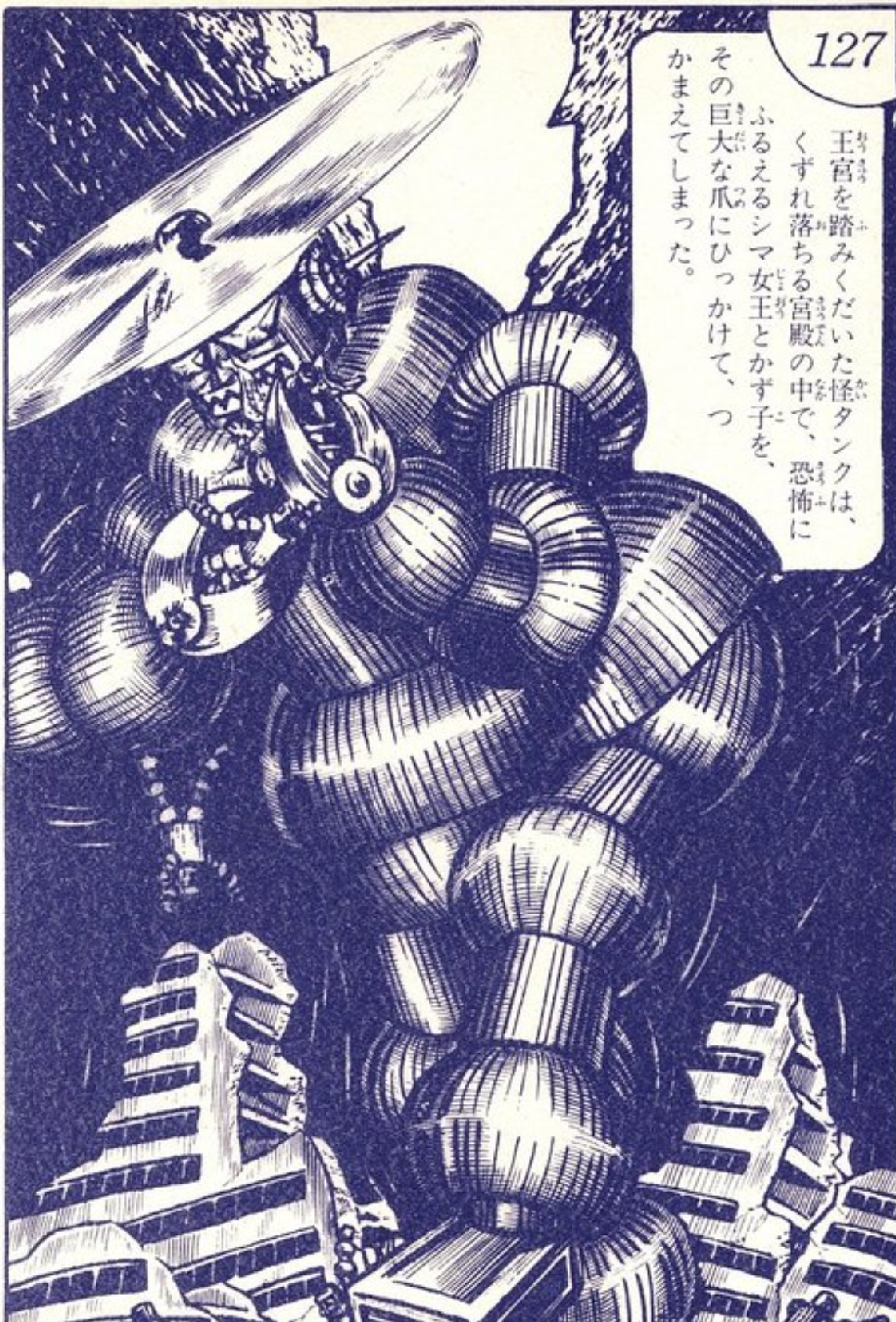


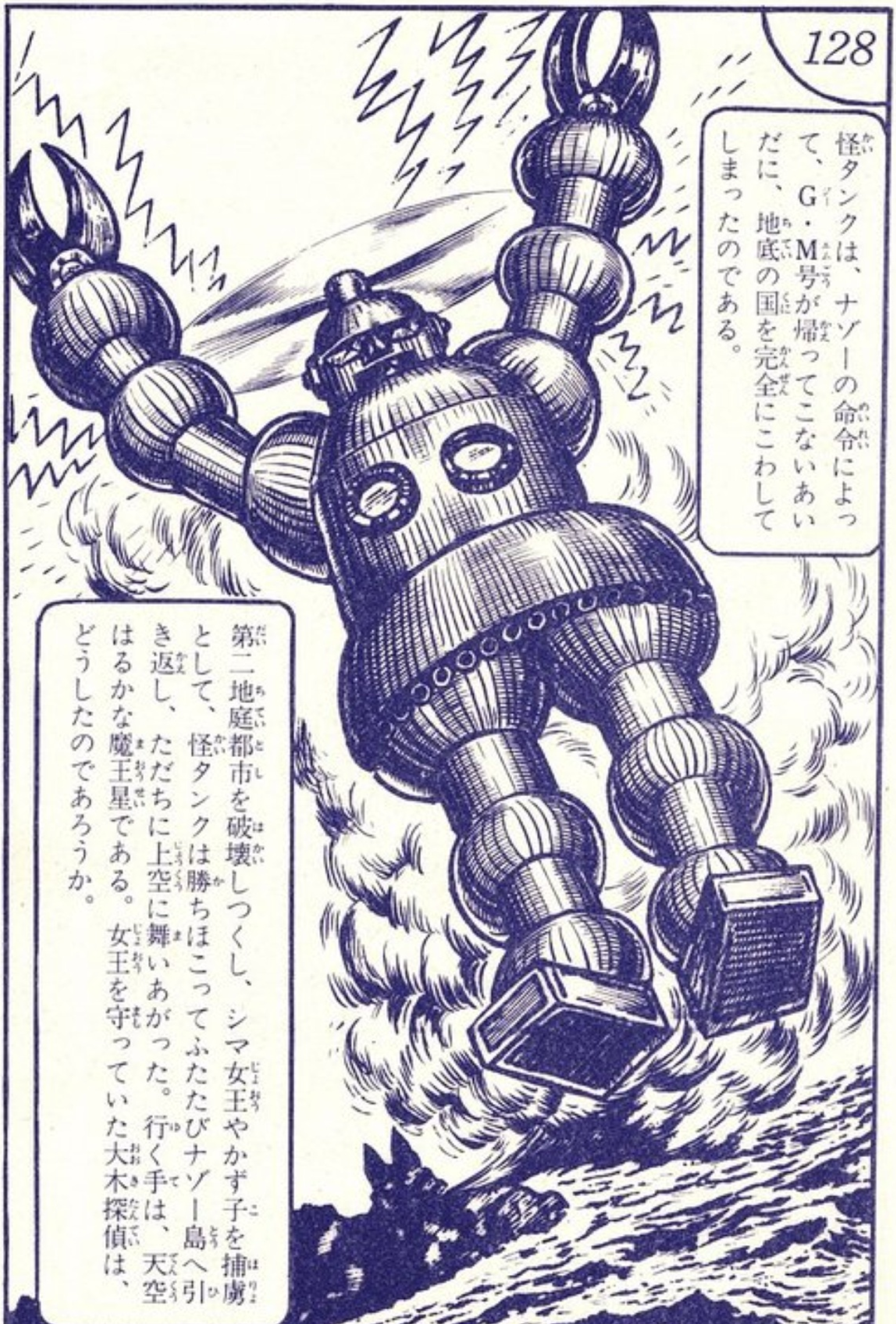
残念ながらG・M号はふたたびから手で地底の都へもどらなければならなかった。G・M号には宇宙飛行の設備がなかったし、また皆が空気のないところで呼吸のできるように酸素管を持つ必要があった。恐るべき空魔大王やナゾーを相手にするには、万全の準備をしなければならぬと、モーグリ博士は考えた。しかし、この頃、ナゾー島の怪タンクは、恐ろしい悪計をめぐらしていたのである。


120
お熊さん ブヨ第一号から命令がきましたよ
怪タンクは 宇宙飛行の設備ができしだい 地底国を襲撃せよ
しかして シマ女王や おもだった者を 捕虜にして 魔王星につれてきたれ!
121
おやまあ たいへんだね
お熊さん まだ 地球の地底の都を見たことがないから 案内をたのみます
あいよ 案内するよ
122
さあ 怪タンクに ロケット推進装置をつけたから もういつ 天空を飛んでも だいじょうぶだ
空魔さん だいじょうぶかね 途中で落ちたらこまるよ
空魔人は飛行になれてますから安心なさい
さあ! 手はじめに 地底国で あばれてこよう


123
124
地底国は上と下の二段になっているのだよ　第二の地底の都をおそうことにしよう
OK　承知しました
ゴロロン
ゴロロン
ゴロロン
モモンガーお熊の案内で、残っていた空魔人のひとりが怪タンクを操縦し、地底の第二の都へ襲撃していった。ああG・M号は宝庫の探険から、まだ帰ってこない。その留守中のできごとである。


125
人工光線で明るかった地底の街が、突然、まっ暗になってしまった。
まあ どうしたのでしょう 空があんなに暗くなってきましたわ
おお！ 女王 なんだか変な音がしていますよ
126
ガラ、ガラ、ガラと大音響とともに地底の第二の都はくずれ落ちた。おお、巨大な怪タンクの足が力まかせに踏みつぶしはじめたのである。


127
王宮を踏みくだいた怪タンクは、
くずれ落ちる宮殿の中で、恐怖に
ふるえるシマ女王とかず子を、
その巨大な爪にひっかけて、つ
かまえてしまった。


128
怪タンクは、ナゾーの命令によって、G・M号が帰ってこないあいだに、地底の国を完全にこわしてしまったのである。
第二地底都市を破壊しつくし、シマ女王やかず子を捕虜として、怪タンクは勝ちほこってふたたびナゾー島へ引き返し、ただちに上空に舞いあがった。行く手は、天空はるかな魔王星である。女王を守っていた大木探偵は、どうしたのであろうか。


129
怪タンクは、一時間千キロのスピードでN島から空高く舞いあがった。
130
全速力でプヨのあとを追う怪タンク。地球ははるか下に小さく輝いている。
怪タンクは、雲も風も雨もない宇宙を突破して……。
131
いやです 死んでも いやです
女王 空魔大王に 降参した方が いいですよ
この小娘は いつも わたしのじゃまする にくいやつだ 魔王星につれて いって うんと いじめてやろう


132
133
空魔さん なんだかからだが軽くなってきたようだよ どうしたわけだね
もう 地球の引力の とどかない高さを飛んでいるからですよ 少し中の圧力を強くしよう
134
ほんとうだ よくなったよ だが 今度は息がつまりそうで 頭が痛いよ
お熊さん 空気と同じ圧力にしたから もうだいじょうぶですよ
中の酸素がなくなったからだ このセットをつけなさい
135
少し いじめてやりましょう
エッヘへ おまえたちは苦しんだがよい
女王さま息が苦しくなりましたわ どうしましょう


136
ウフフフ だいぶ まいったね もう少し そうして いろ
らんらんと光る目がこのようすを機械の影から見ていた。
137
おおっ！突如、姿をあらわした黄金バットは、にくにくしくいばっていたお熊をうちたおした。
お熊ばばぁ 女王と かず子に その 吸入 セットを つけろ
138

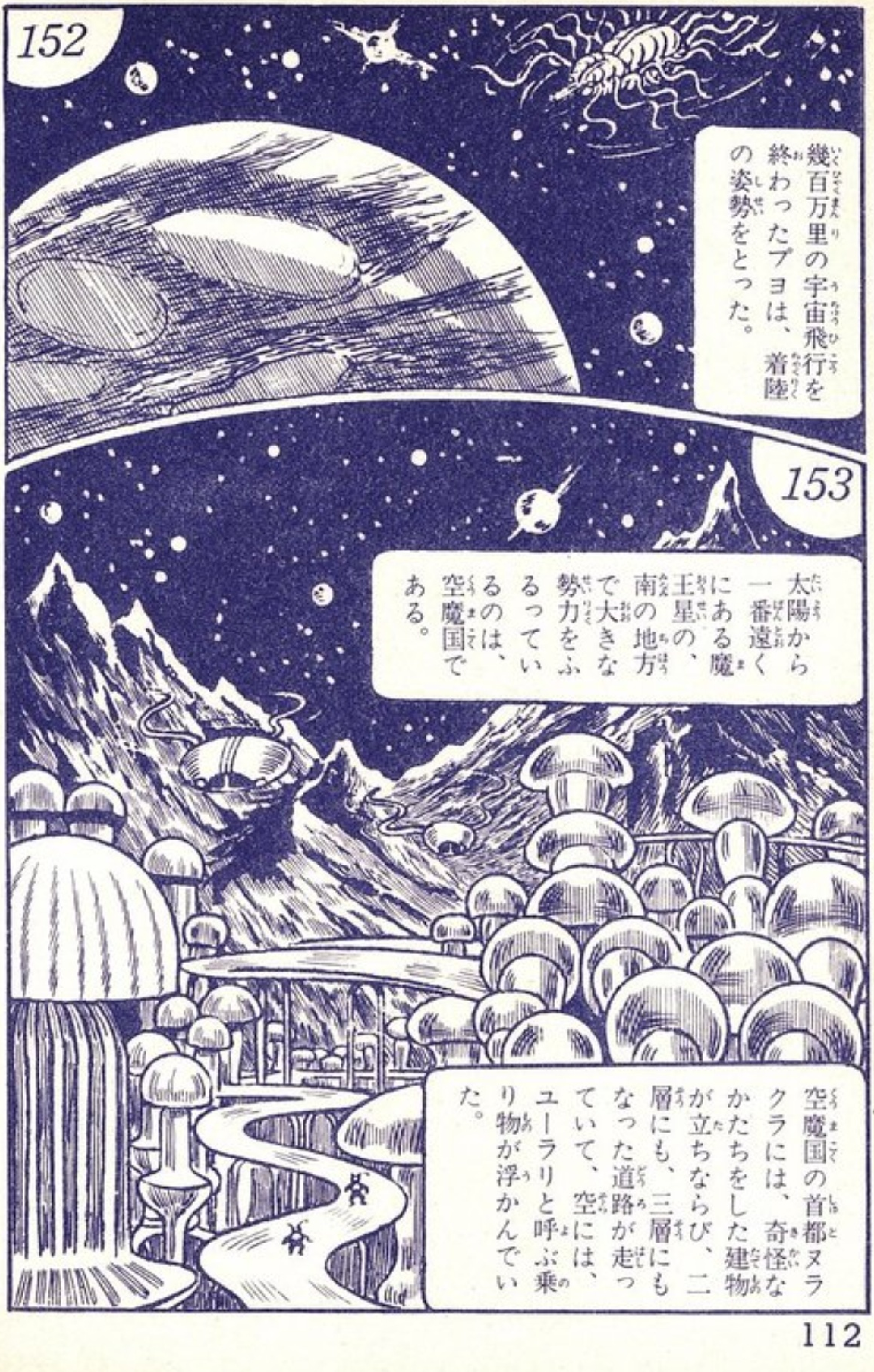

139
いやな やつが 出てきたよ
空魔人よ 余は なんじ とともに 魔王星へ行くのじゃ おとなしく 案内いたせ
へいへい 何でも おっしゃる とおりにします から 命だけは たすけてください
140
噴射推進装置（ガスを吹きだして進むしかけ）に切りかえた怪タンクは、内部のできごとも知らぬげに大宇宙を飛んでいく。プヨの姿は、まだ見えないが、宇宙波を利用した通信装置によって、プヨと連絡はとれた。


141
ふたたび、地底の都へ引き返して、G・M号がそこに見たものは、なんであったろうか。科学の粋をこらした地底の都市も、美しくりっぱだった王宮も、いまは見るかげもなく、破壊しつくされていった。そして、光を失った暗黒の中で地底人たちは、ぼう然としてなすところを知らなかった。
にくむべきナゾーと空魔人は、シマ族の宝庫を荒し、それでもあきたらず、この都までも破壊しさったのである。そのうえ女王とかず子をつかまえ、天空はるかな魔王星へとつれ去った。しかも、不幸は、それだけではない……。
142
何！ 大木さんがけがをなされたと……!!
たいへんです 女王も かず子さんも 怪タンクにさらわれ 大木さんが 大けがを されました


143
まさるの父、大木探偵は、女王を守ろうとして、怪タンクに、ふり落とされ、重い石の下に倒れていた。
あっ！おとうさんが倒れてる
144
まさるか！ごくろうであった わしは もうだめかもしれぬが 女王や かず子さんを必ずたすけよ
145
おとうさん 傷はあさい だいじょうぶですよ 女王さまたちは 必ず ぼくが たすけだします
みなさん もうしわけがない あの怪タンクには とても 人の力では勝てない なんとかして 女王を たすけたいと思ったがだめでした


146
147
プヨの眼下に、いまや魔王星は、大きくゆるやかにまわっている。
そして、そのあとを追う怪タンク。その中には、超人正義の神、黄金バットが乗っている。
148
数限りのない謎を秘めた大宇宙は、三者の飛びゆく姿を知ってか知らずか、ただ暗黒のやみにつつまれ、星のみが静かにまたたいている。
G・M号もまた、大宇宙を飛ぶための新装置を完全にほどこして、女王やかず子をとりもどすべく、怪タンクのあとを追っていく。


149
魔王星はずいぶん遠いなあ着くまでにどのくらいかかるのか
さようさよう 地球から一番遠くにある星ですからね しかしもうすぐ着きますよ
150
魔王星がだいぶ大きく見えてきました もうすぐ着きますよ
151
地球の三倍もある広大な魔王星が、眼下に横たわっている。そこには緑の山々をぬって、運河がじゅうおうに流れ、クーマ人の住む都市があちこちに点在していた。おお、地球以外にこのような国のあることを我々は知っていたであろうか。


152
幾百万里の宇宙飛行を終わったプヨは、着陸の姿勢をとった。
153
太陽から一番遠くにある魔王星の、南の地方で大きな勢力をふるっているのは、空魔国である。
空魔国の首都ヌラクラには、奇怪なかたちをした建物が立ちならび、二層にも、三層にもなった道路が走っていて、空には、ユーラリと呼ぶ乗り物が浮かんでいた。


154
地球人が、考えもつかないようなこの文明の都市で、空魔人を押さえつけ自分の命令のままに動かしているのは、空魔大王であった。
さわがしいぞ 静かにいたせ 重大な相談のさいちゅうじゃ
大王さま 一大ニュースでございます
155
ガラスのように透きとおっていて、しかもゴムのようにやわらかい、ふしぎな壁におおわれたりっぱな大広間で、いましも会議中の空魔大王のもとに、ひとりの家来がかけつけた。
ただいまプヨ全部が地球から帰ってまいりました いかがいたしましょう
なに プヨが帰ってきたとな では さっそく呼んでまいれ すぐに会おう
また コーカスを多量に持ってまいったのですが それはどこにしまっておきましょうか
ややっ！ それは大成功であったな コーカスは第三工場に移しておけ


156
長いあいだご苦労だった コーカスをたくさん持ってきたそうだが そなたの功は第一級じゃ 地球にはコーカスがまだあるのか?
大王さま ご安心ください 地球の中の地底国には無尽蔵にございますから あれを奪い取れば 空魔国は ばんばんざいです
それに ナゾーさまたちをおつれいたしましたから コーカスを手に入れることについて 十分ご相談できましょう
地球で名高い悪の王者 ナゾーどのがみえたとな それはめずらしい これにおとおしもうせ
157
158
ナゾーどの 遠いところをよくこられた いざこれへ


159
ほかならぬ空魔大王のおおせ　何なりとお手伝いしましょう　我らは　地球上の善なるものは　皆ほろぼしたいと考えております
コーカスを手に入れるについてはいろいろとお骨折りを願ってありがとう　地底国のコーカスを　全部略奪したいと思うナゾーどの　お力をぜひお借りしたい
黄金バットという者が　我々のじゃまをいたすゆえ　なかなか思うようにまいりませぬ　彼はなかなかの剛の者　大王どのにもちと　手にあまる　しろものかもしれませぬ
なんといわれるか！　黄金バットが　いかに強くとも　よもやこの空魔大王に　かなうはずはございまい　わがはいが　ひとひねりに　ひねりつぶしてくれようぞ　だがしかし　ナゾーどのには　からだが不自由と見うけられるが　コーカスのお礼として　足をさしあげよう　しばらく　お待ちあれ！
何！　足をくださるとな！　それはありがたい　さりながら　そのようなことができまするかな？
160
おもしろき人物じゃ　第一病院からヘプリン先生を呼んで　足を一本とどけさせよ
皆さんこちらへ　長い旅でおつかれでしょう


161
さっそくナゾーどのに　進呈いたすから　すぐとり付けの用意をしてくれ
大王さま　とびきり上等の足を用意いたしました　さっそくナゾーさまにとり付けましょう
162
まもなく空魔宮殿の大広間で、盛大な足の贈呈式がおこなわれた。コーカスを手に入れるについて、ナゾーの協力に対する空魔大王のお礼であった。
ナゾーさま　地球人の足など　足もとにもおよばない足ですぞ

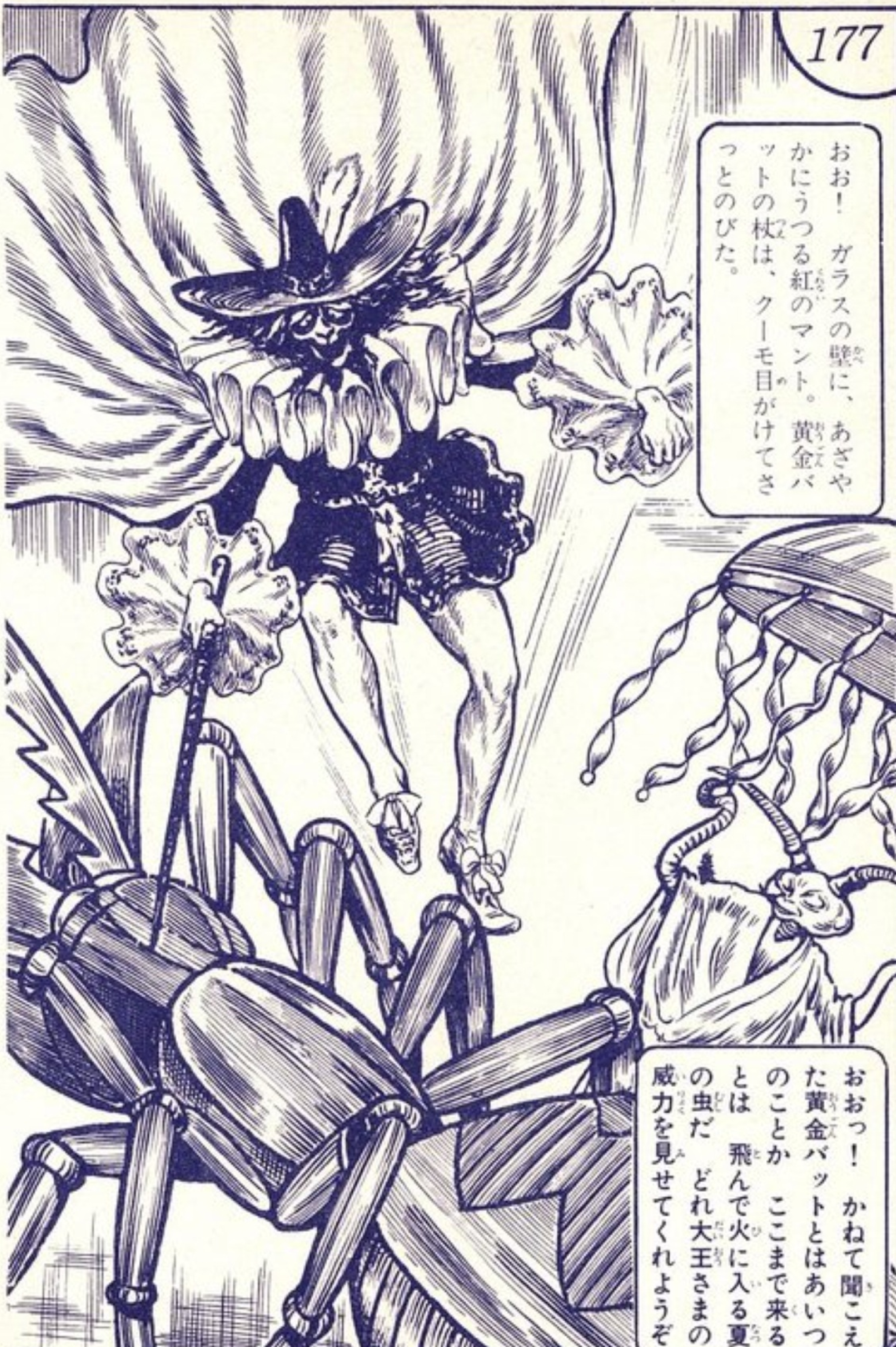

163
ヘブリン先生　くすぐったいですな　でも　さっぱりしたよ
なれれば何でもなくなりますわい
164
これはぐあいがいいぞ　ありがたいありがたい
165
ナゾーどの　わしは　地底国にあるコーカスを　全部手に入れたいのだが　なんとかよいくふうはないか　それさえ成功するならば　地球の方はいっさい　おまえにまかせるし　また　空魔国の科学知識の全部をあげて　ナゾー一味を　たすけてやろうではないか
それには　コーカスの正しい所有者である　シマ国の女王をおどかして　まきあげるのが　いちばんいいでしょう
わたしの部下が怪タンクを操縦して　もうすぐ来るでありましょう　シマ国を荒らし　女王をいけどりにしてくるように命令してあるから　たぶんつれてくると思います


166
はてしもない天空を、ひたすらに飛びつづける怪タンク。プヨの姿は見えないけれど、高度計は、すでに魔王星への到着がま近いことをあらわしていた。
167
魔王星大陸が真下にせまってきた。空魔国の建て物が、あちらこちらに点在している。
168
おおっ　我らの怪タンクきたる　女王を捕虜にし　お熊も乗っているだろう
怪タンクが到着した　装置ができたのだな


169
おっ！黄金バットが見えなくなってしまったどこへ行ったのだろう
さあ いよいよ空魔国へ 着きましたよ おりる用意をしてください
170
黄金バットめ いよいよ空魔国に近づいたら こわくなったのだろう あいつは化物だから いつでも 消えたり出たりするよ
黄金バットがいなくなったのは ちょうどさいわいだ バットが気のつかぬうちに 女王を山奥にかくそう
空魔大王から迎えのユーラリです どうぞお乗りください
地球人だ みょうなかっこうをしているな
171
地球人の女の子は ずいぶんかわいいな


172
地底国のシマ女王よ 遠いところをよくこられた わしは空魔大王じゃ ときに相談じゃが地底国のコーカスをわしにくれぬか お礼は十分にだす 聞かねばこわいおもいをさせるぞ!
女王よ しばらくであった 地底の金銀財宝はわしがもらっておいた コーカスは空魔大王にさしあげたほうがおまえのためだ
あれはわたくしひとりのものではありませぬ 地底国人と相談してみなければさしあげられません しかし正しいことに使われるのでなければ地底人は承知しないでしょう
173
空魔大王どの 女王はなかなかいうことを聞くような女ではないです わしもだいぶてこずったことがありますよ 少しいじめたほうがいいですよ
そうか おだやかに話してもわからなければやむをえない
174
おだまり ナゾー 地底国をさんざん荒らしわれわれの宝を奪いながら なおあきたらず空魔大王とやらと手を組んで……
空魔大王のミミズのような手が、たれさがっているうすい金属のひもにのびた。


175
空魔大王の合図にこたえ、ジュージューと天井から無気味な音をたて、巨大な怪物クーモが降りてきた。そして口から、ねばねばしたものを吐きだしはじめた。
176
白い糸は、みるみるうちに女王とかず子のからだを包み、丸いカラの中にふたりをとじこめてしまった。


177
おお！　ガラスの壁に、あざや
かにうつる紅のマント。黄金バ
ットの杖は、クーモ目がけてさ
っとのびた。
おおっ！　かねて聞こえ
た黄金バットとはあいつ
のことか　ここまで来る
とは　飛んで火に入る夏
の虫だ　どれ大王さまの
威力を見せてくれようぞ


女王とかず子は、かよわい女のこととて抵抗することもできず、クーモの吐きだす糸のためにとじこめられてしまった。この奇妙な玉は、ふたりを包んだまま、ふわふわと空間に浮かんでいる。その白色透明な玉を、クーモがひとのみにしようとしたせつな、「ウワッハッハッハッ！」と、なつかしき笑い声。おお！ それは絶えて久しき、黄金バットの登場である。そのさっそうたる姿を、天空の魔城にあらわしたのである。
ヒャーッ！ あれが黄金バットか 変なやつだ どこからきたのだろう
あれっ！ あいつは また こんなところへ出てきたよ いやなやつだ あいつを見るとわたしは熱が出るよ
ややっ！ 黄金バット よもや ここまではこられまいと思ったのについてきたか いでや目にもの見せてくれようぞ！


178
こしゃくな黄金バットめ！ 空魔城をおまえなんかに荒らされてたまるか！
179
空魔大王は、ふたたびその頭上からたれさがっている金属のひもをぐっと引っぱった。するとき奇怪至極、またもや天井から数本の足のようなものが、ぬるぬるとおりてきて……。
黄金バットのからだに、ぐるぐるとまきついてしまった。もがけばもがくほど、手や足にひるのように、からみついているのである。
下で待ちかまえていたクーモは、あやしい白い糸を吐きながら、自由を失った黄金バットを包もうとしていた。


180
神変不可思議な力を持ったさすがの黄金バットも、ついに白いビー玉の中にとじこめられてしまった。クーモは、黄金バットや女王、かず子をひとのみにして、魔城の広間を去っていく。
181
182
ざまを見ろ黄金バットも最後のときがきたのだ！ ずいぶんてこずらせたなあ
黄金バットたちのビー玉をのみこんだクーモは、歓呼の声に送られて、天空の魔城のかなた、けわしい山岳地帯目ざして飛び去っていったのである。


183
クーモは、山あいの谷間で待っている怪タンクのところへ飛んできた。そうして、腹の中の黄金バット、女王、かず子たちのはいっているビー玉を、怪タンクに落としてやった。
184
ウハハハ　さすがの黄金バットもとうとうつかまったか


185
黄金バットよ　おまえも空魔大王にはかなわなかったとみえる　ビー玉にとじこめられてしまうとはあわれなことだ　地球ではだいぶおまえにいじめられたがこの空魔国ではわがはいの勝ちだ　どれ踏みつぶしてやろうかい　念仏でもとなえたがよい
女王よ　おまえも大王さまのいうことを聞かないばかりに　わざわざここに死ににきたとはかわいそうだな
怪タンクは、あわれとらわれの身となった黄金バット、女王、かず子の三人をひとつぶしにしようと、その大きな足を持ちあげた。
186


187
ドスン!! ドスン!! 大地もめりこむほどに怪タンクの足は踏みおろされた……。あっ!! 重い巨大な怪タンクの下に、正義の神、黄金バットの運命もきわまったか!
188
「やあ、これでひと安心だ。黄金バットや、女王がいなくなれば、あとはおれたちの天下さ。」怪タンクの中のドブロクスキー博士は、にんまりと、うす気味悪く笑った。
ヤヤッ変だぞ! どこへいったのだろう
189
ビー玉に入れられた三人が、せんべいのように押しつぶされているかと思ったら、案に相違して、三人の姿は影も形も見えなくなっていた……。


190
大王どの 貴殿の力はたいしたものですな あの黄金バットをビー玉にまるめこんだ手ぎわなどは できない芸当でござる いやまったく感心いたした
なあーに あんなことは朝めし前でござる 黄金バットもいま頃はせんべいみたいになっているだろう ひとつ祝盃をあげようか
黄金バットをほうむった喜びにわく天空の魔城の大広間……。クラゲの天ぷら、毛虫のすのもの、ねずみ酒など、数々のごちそうにしたつづみをうち、酔いしれているのはナゾーたちである。
192
空魔大王どのこれはめずらしいごちそうでござるな
それは空魔国特産のミミズのつくだ煮でござる十分におあがりめされ
191
大王さま たいへんでございます 黄金バットがゆくえ不明になったとドブロクスキー氏から入電がありました
な 何？ 黄金バットがいなくなったとな たわけ者め 草の根分けてもさがしだせい


193
怒った空魔大王は、頭上にさがっている第三の金属のひもを、ぐっと引っぱった。すると、お、お不思議や……。
194
大王の立っていた透明な床が、テレビジョンの映像板と変わり空魔国の山や怪タンクのようすを、ありありとうつしだしたではないか。
195
はてこれはいかがいたしたことだろう? 大地がゆれているではないか
怪タンクめ 失敗しおったか! しようのないドブロクスキー博士だ


196
グラグラグラ　大地がゆれる。大地震である。ものすごい大音響とともにまっ二つに割れる大地。
197
ゆれる大地から、ぬっとあらわれたのはG・M号であった。蛇王、モーグリ博士、まさるを乗せたG・M号は、ついに魔王星に到着したのである。
198
ややっ！　とんだところにG・M号があらわれたわい　どうしてやってきたのだろう


199
地底国で、なんどもG・M号によって苦杯をなめた怪タンクは、G・M号の姿をみるや、いっさんに天空の魔城目ざして遁走をこころみた。
200
黄金バットのやつどこへ逃げたかと思ったらG・M号に逃げこんだなわしはG・M号が苦手じゃどれ まず退却だ
201
よろしいあいつは悪いことをしてこまる
モーグリ先生怪タンクは悪いやつですこんどはつかまえてぶちこわしてやりましょう

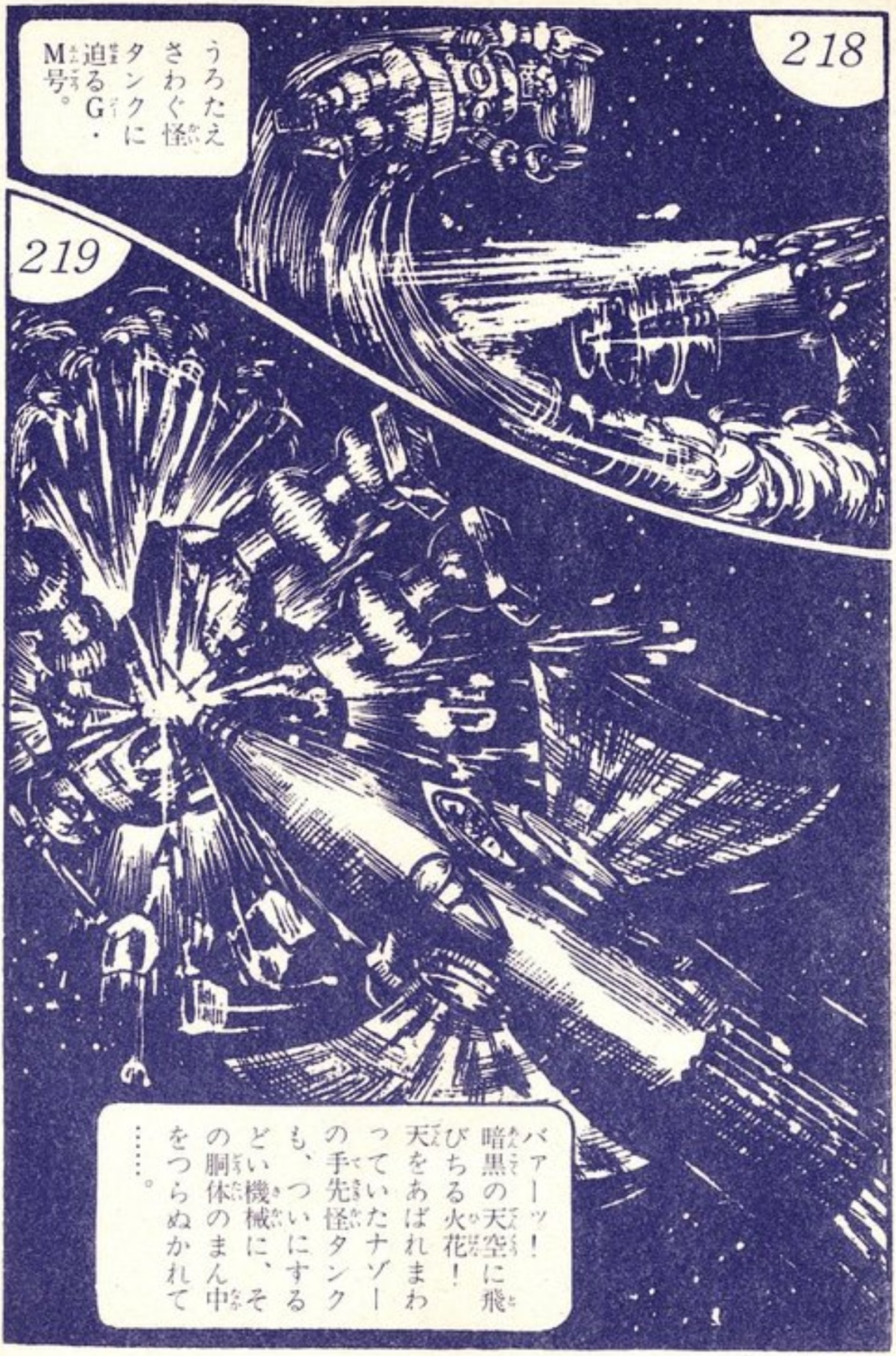

202
ナゾーの部下のドブロクなんてやつは ものの役にたたぬわい どれ わがはいが黄金バットを退治してくれん
203
204
大王どの まず おとどまりください このたびは このナゾーが出むいて ひっとらえてみせます
205
危機一髪のところで地中に身を沈め、女王とかず子をG・M号に移した黄金バットの神わざ。
おお！ G・M号上には、さっそうと紅のマントをひるがえす黄金バットの姿があった。そして、かたわらにはまさる少年がひかえていた。G・M号は空魔城目ざして進んでいく。


206
なあに なんでもないさ 宇宙線を固形化したものだから コーカス・イオンを投射すれば わけなく溶ける 空魔国の科学も なかなか進んでいる
こまりましたなあ 先生 ふたりをたすけだす方法がありますか
207
おお モーグリ先生 ここはG・M号の上ですね 怪タンクに踏みつけられたはずですのに どうしてわたくしたちはたすかったのでしょうか
黄金バットが怪タンクの足もとからG・M号にうつしたのです
モーグリ博士の操作するコーカス・イオンによって、ビー王は溶けた。
208
まさるさん わたくし ほんとうにこわかったわ! 空魔大王はとても こわいわ
かず子さん しばらく会わなかったね ずいぶんこわいめにあったでしょうね


209
モーグリ博士よ
わしは黄金杖を
とり返すために
空魔城へいく
きみたちは怪タンクを
破壊してから魔城へ
きたれ！　わしが信号
をしたならば魔城をも
破壊するのだ
210
怪タンクは、G・M号に追いかけられて、逃げまどっている。G・M号から身をひるがえした黄金バットは、魔城めざして飛んでいく。
211


212
黄金バットの
杖だな
ざまをみろ
やつは活動で
きないだろう
へし折って
やろう
213
214
怪物「クラーゲ」によって奪い
とった黄金杖を、空魔大王がい
ま、まさに折ろうとしたとき…。
突然、さっと
伸びた黄金バ
ットの手が、
空魔大王から
黄金杖を奪い
かえしてしま
った。

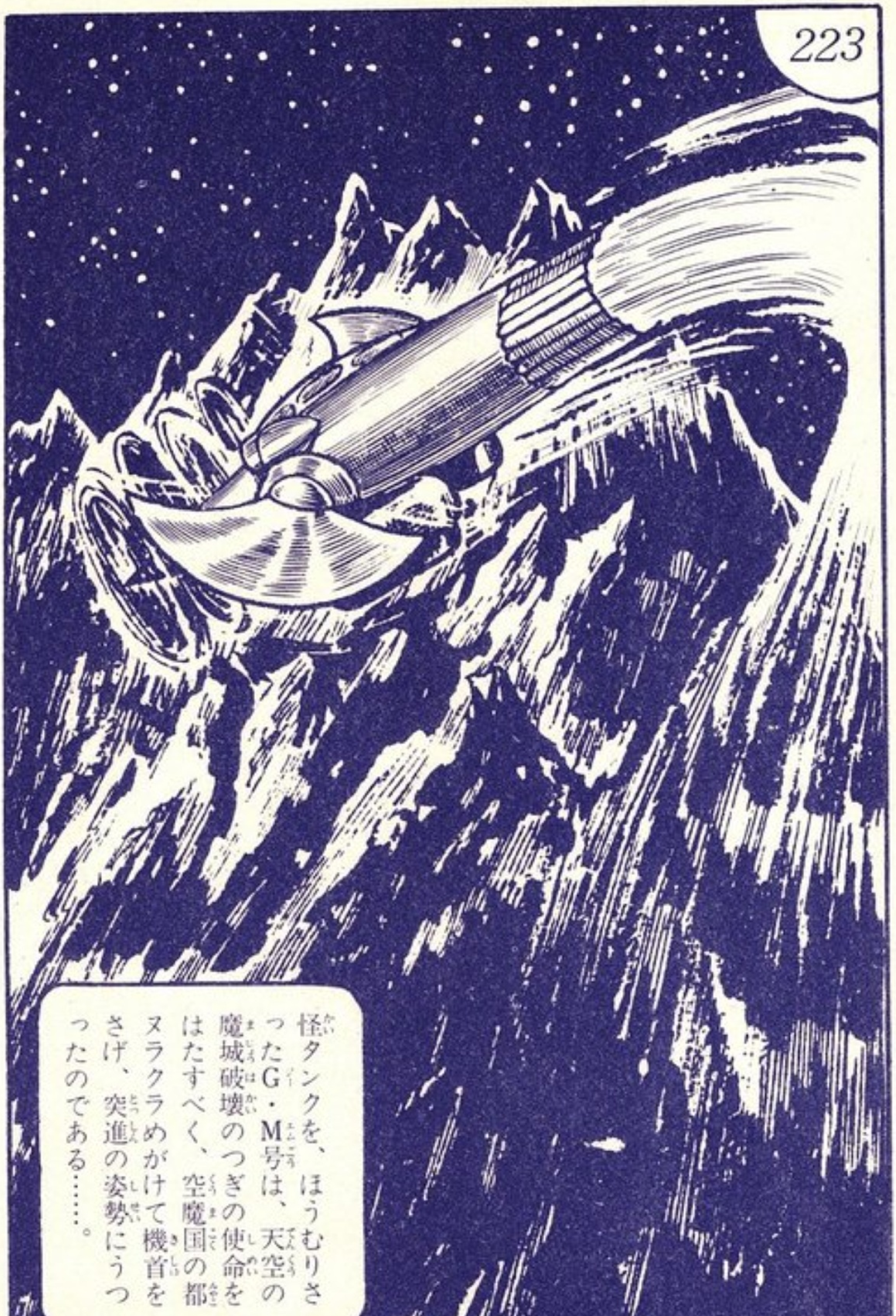

215
空魔大王よ ナゾーよ なんじらの最後のときがきたぞ 魔城機械装置はすべて破壊したからいかにもがこうともむだだぞ
216
しょうこりもなく また出てきたか クラーゲの威力を ふたたび味わいたいのか
やっ スイッチが動かない
217


218
うろたえさわぐ怪タンクに迫るG・M号。
219
パアーッ！暗黒の天空に飛びちる火花！天をあばれまわっていたナゾーの手先怪タンクも、ついにするどい機械に、その胴体のまん中をつらぬかれて……。


220
重心を失った怪タンクは、はてしない天空を燃えながら、落ちていく、落ちていく。
221
その頃、彗星のようにに長い光の尾をひきながら、魔王星に近づく光の集団があった。はたして、何ものぞ。


222
天空の魔城内の機関室を破壊して、ふたたび、空魔城にのりこんだ黄金バットの前には、空魔大王も、ナゾーも、手のほどこしようがなかった。逃げようとするナゾー一味をふみ倒し、空魔大王にせまる黄金バット。
おかしら いくじがないね バットをはやく うちたおして おしまいよ
わたしの頭をふんづけて いまいましい黄金バットだよ
だめだ バットにはピストルは役に立たない


うー うー 残念 機械装置をこわされてしまったのか だが まだ最後の手段が残っているぞ バットめ 手をはなせ
者ども! なにを まごまごしておる クーモの自動装置がきかぬのだ おまえたちですぐ操縦して出動せよ
たいへんだ 地がゆれる 大地がゆれて家が倒れるぞ
だめだ 床がゆれて動けない
大王の身にせまる危険を目の前にして、空魔人は、あわてさわぐばかりで、なす術を知らない。おりしも、ゴーッと異様な音が、空魔城をふるわせながら、とどろきわたった。
おい二~三人クーモに乗りこめ! 大王をたすけねばならぬ


223
怪タンクを、ほうむりさったG・M号は、天空の魔城破壊のつぎの使命をはたすべく、空魔国の都ヌラクラめがけて機首をさげ、突進の姿勢にうつったのである……。


224
一段と光を増したあやしい彗星は、みるみるうちに大きくなって、魔王星に突進してくるのであった。それは、なにものであろうか？
225
やっ！道がゆれて歩けないぞ
たいへんだ地震だ　おたすけください神様！
226
ウワーッへんな星が飛んでくるだいじょうぶかな
地震と怪彗星の出現天変地変だ


グッラ、グッラとくずれ落ちる天空の魔城の地中から、突如、おどり出たG・M号！　中から飛びだしてきたまさる、蛇王、プクちゃんは、モモンガーのお熊、ハルピンお光のふたりをつかまえてしまった。
227


「ウワッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ。邪悪なる空魔大王よ。無道なるナゾーよ。なんじらが夢みるいつわりの権力を、根こそぎ打ちほろぼしてくれようぞ。」と、高らかな黄金バットの正義の声が天空にこだましました。

228



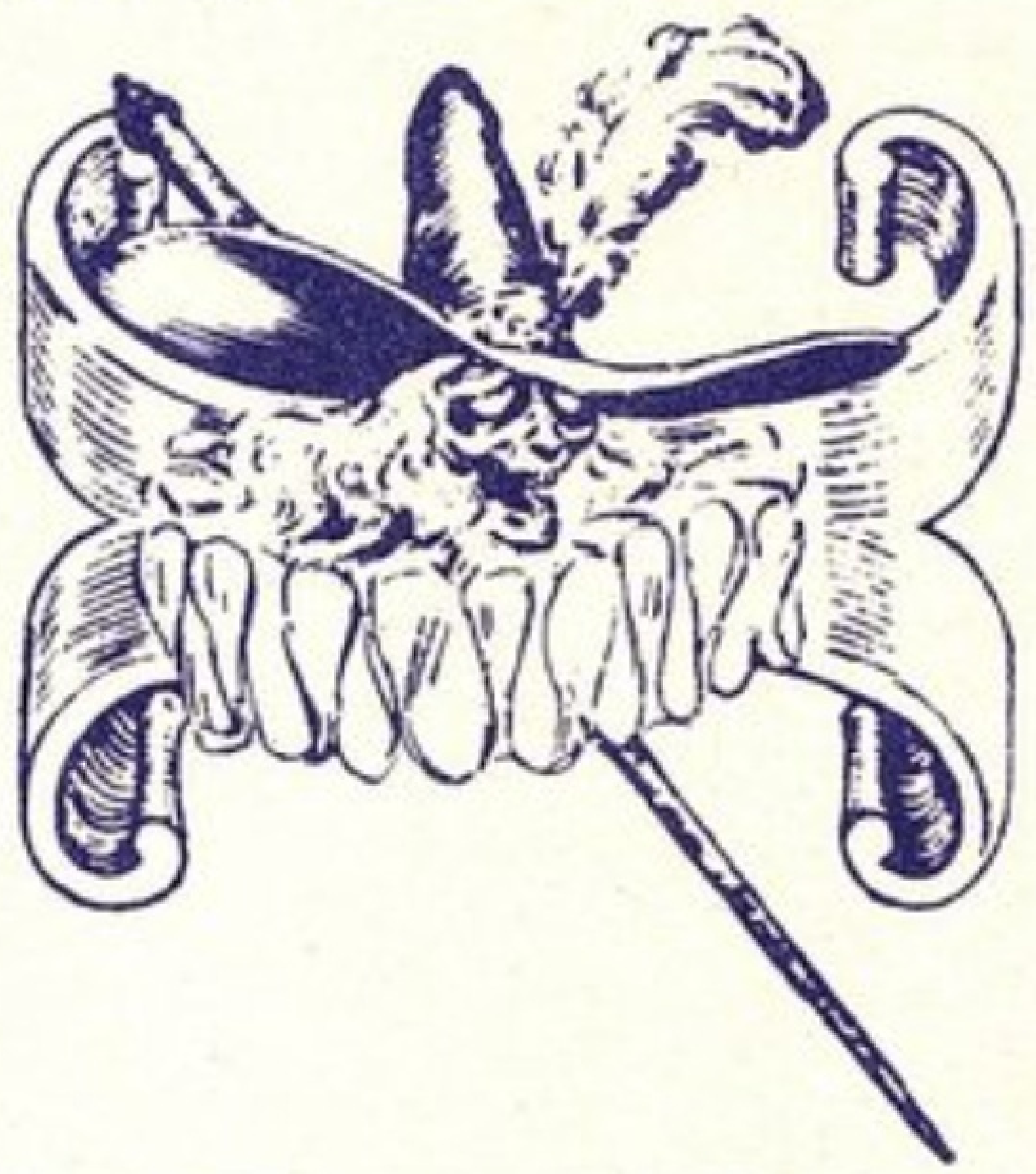
ゴォーッ、ゴォーッ、ゴォーッ。突如、天地をゆるがす大音響！魔王星めがけて突進しつつあった怪彗星が、天空の魔城に落下したのである。

たちまちおこった狂乱の声も、一瞬のあとには、ただ目もくらむばかりのこうこうたる白熱光の中につつまれてしまった。黄金バットのふりかざす正義の杖のもとに、ひれ伏すかと見えた空魔大王やナゾー一味も、白熱の光の謎にまきこまれてしまった。

謎の彗星の正体は、何であったろうか？　黄金バット、まさる。女王たちの運命やいかに！

永松健夫と黄金バット

加太こうじ



昭和五年、十八歳のアルバイト学生永松武雄は、東京・下谷の裏長屋に本拠をかまえた紙芝居製作所蟻友会の、新聞の三行広告による画家募集に応募して、八十数人中二人採用の難関を突破して紙芝居の絵描きになった。それまでの永松は、伯父が経営する中華ソバ製造所の配達をやりながら、芝浦高等工芸学校図案染色科へかよっていた。

永松は蟻友会では、最初に田中次郎という紙芝居屋の台本で『魔法の御殿』『黒バット』等を描き、五年秋からは鈴木一郎の台本で『黄金バット』を描いた。鈴木一郎は本名平太朗。押川春浪の武侠小説と、アメリカ映画のロン・チャニー主演『オペラの怪人』の怪人のスタイルや、ドイツ映画『ファウスト』のエミール・ヤニングスが扮したメフィスト・フェレスの出現場面などからヒントを得て、黄金バットについての諸アイデアを作った。永松はそれを形象化したが、作者の鈴木がおどろくほどの出来ばえだった。

永松は天才であった。染色図案をまなんでいたので、水溶性酸性染料を使って美麗な彩色をほどこした。また、少年らしい感性にあふれた各登場人物も、実によく描けていた。『黄金バット』は紙芝居を代表する作品になり、永松はたちまち紙芝居画家随一の人気を得た。そして、紙芝居屋という職業が定着した。

永松は昭和七年に工芸学校を卒業すると、紙芝居を描かなくなって、ネクタイ会社に就職した。それで菊地広雲という老画家と、当時十四歳だった私が永松のあとの『黄金バット』を鈴木の台本で描いた。しかし、永松は紙芝居の世界が好きだったし、図案よりは人物画に興味をもったので、ネクタイ会社をやめて挿画などを描き、紙芝居画家たちの指導者になった。沈着冷静、しかも闘志あるいい指導者だった。

なお、本書の初版本は、戦後の出版で最初の劇画本ともいえる。当時大へんな人気を呼んだものである。

（文中敬称を略しました。）

黄金バット初版本の表紙

今回はこのうち、第一巻・第二巻・第三巻を収録しました。



⇧第二巻　地底の国



⇧第一巻　なぞの巻



⇧第四巻　彗星ロケット



⇧第三巻　天空の魔城



永松健夫（本名武雄）略歴
○大正元年3月1日生まれ
○大分県中津市福島小平出身
○芝浦高等工芸学校図案染色科卒業
○昭和36年11月17日死去（享年49歳）
○代表作＝「アトムボーイ」「日輪童子」ほか多数

コミック46

黄金バット（下巻）

昭和53年1月1日初版発行

著者© 永　松　健　夫
発行者 今　井　堅
印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式会社 少年画報社
〒101 東京都千代田区三崎町3－3－12
電話（262）3501（代） 振替東京20260

黄金バットの初版本

黄金バット第一巻「なぞの巻」が発行されたのは昭和二十二年十一月で、二十四年三月までに第二巻「地底の国」第三巻「天空の魔城」第四巻「彗星ロケット」の四冊が発行された。発行所は少年画報社の前身の明々社であった。各冊とも百ページほどで、戦後まもないため、印刷も用紙も現在とは比較にならないものであった。定価は一巻が三十五円、二・三巻が四十円、四巻が六十五円であった。



△第三巻「天空の魔城」の奥付

黄金バット

下巻

第二話 地底の国〈後編〉

第三話 天空の魔城



永松健夫


少年画報社



＊表紙および表紙カバーは、
初版本をもとにして、丸山
元博が模写したものです。


戦後最初の
劇画復刻版
黄金バット
下巻
永松健夫
少年画報社
COMIC46
雑誌3712
●少年画報社 ￥650